心地であつた。淫靡なる音曲は此の風を助長するに於て、與つて力がある。芝居が之を外題として喝采を博したのも、其助長の原因である。幕府が相對死と名稱を附けて之を禁じようとしたが、固より法の制裁で情を抑へることは困難である。萬屋助六の心中噺が關東に下ると、花川戸助六の俠客の達引に變化する程武張つた關東でも、豐後節だの其他の挑發的の音曲が流行するにつれて、遂には、君と寢ようか、五千石取ろかの箕輪心中が行はるゝに至つた。

元祿前後には富の勢力が加はつて、一方には成金の大分限者も出來る代りには、他方に生活の困難もあつた。また富の勢力と與に、風俗も華奢となり、淫靡なる世態となつた。それで武士階級にて名を樹つると同じく、心中を以て艶名を流すことを以て遊蕩兒の譽となしたものである。猶此上に宗教上の未來觀念も多少は影響したであらう。文藝や、音樂やがこれを助け成して日本は心中一の國となつたりけるよ。

第二十八　百濟河成

今昔物語に、百濟河成と飛驒工とが技術の競爭をしたことが載つてゐて、名高い事實として傳へられてゐる。此の河成の作品は現存するものが絶無といつてよい。此人の遺作だと稱する四天王の畫像と云ふものがあるが、これも當にはならぬ。であるから、何の位の名人であつたかは固より不明であ

る。けれども似顔繪の名人と見えて、或る時其召使ふ童が行方も知れずなつた。それを探す爲にさる男を雇つた處が、其の男の言ふには、易き事にはござれど、童の顔を知りたらば搦め捕へる事も出來ませう、知らではそれも成りませぬとあるに、河成實にもと紙を取つて童の顔を書き與へた。雇はれた男は人の群れ集ふ市に入つて洽ねく求めたが、似た顔がない。暫く佇んで居た所によく似た童が出て來たので繪を取り出して之と比べて見ると、つゆ違ふ所もない。さては此の童に相違あるまいと其儘引つ立てゝ河成の許へ連れ行つた。すると如何にも其通り、河成の求める童であつたから、河成も甚く喜んだと見えてゐる。

其頃飛驒工といふ名工があつた。世に雙び無き者と稱せらる。或時飛驒工が河成に打ち向ひ、我が家に一間四面の堂を作らへましたから御覽に御出で下されまし、壁に繪でもお描き下さいませと云ふ。其言に隨ひて河成が飛驒工の家に行くと、如何にも可笑氣な小さな堂がある。四面の戸は皆開いてゐる。飛驒工は彼の堂に入つて内を見たまへと云ふに、河成、南の戸から入らうとすると、其戸がぴたりと閉ぢる。驚いて西の戸から入らうとすると、これもはたと閉づ。すると南の戸は元の樣に開く。北の戸より入らうとすると、其戸は閉ぢて西の戸が開く。東の戸から入らうとすると其戸が閉ぢて北の戸が開く。ぐる〳〵廻つて度々這入らうとしたが、どうし

ても這入ることが叶はぬ。飛驒工は此狀を見て腹を抱へ笑ふに、河成は殘念ながら其儘歸つた。

河成は何とかして此の敵打をしてやらうと考へ、一日飛驒工の許に申し送るには、我家へ來たまへ、御見せ申す物がある。飛驒工は定めて我を計るのであらうとて應じなかつたが、度々の慇懃なる招待に已むを得ず遂に河成の家に赴いた。此方へ入らせたまへといふ案内につれて、廊下のある遣戸を引きあけて中に入らうとすると、不思議や、黑く腫れ上つた人の屍骸が横はつて居る。臭氣鼻を衝くやうに覺えて、思はずあつと聲を揚げて其儘退却すると、内から河成の笑ふ聲が聞える。遣戸から顏を出して、此處に居るから來れといふ。飛

驒工は恐る〳〵近いて見ると障子に死人の形を描いてあつたのである。今昔物語には其終りに記して『其頃の物語には、萬の所にこれを語りてなむ人みな賞めけるとなむ語り傳へたるとや』と云つてゐる。併し此の兩者の技術上の競爭は果して事實であらうか。河成の事は史實も存在してゐるが、飛驒工の事は皆目分らぬ。今昔物語には豐樂院は此人の建築に成つたから微妙であると云てあるが、是とても明でない。

雜譬喩經に云ふ、昔北天竺にさる彫刻家があつた。木彫の美人を作り、衣裳髮容總て當世風にし、それで歩行もし、酒の酌をするやうにしつくらつた。たゞ如何にせん木彫の美人であるから、解語の花ではなかつた。こゝに南天竺に一人の

畫家があつて、また斯道の名人と稱せられた。彫刻家は其の噂を聞き、數多の馳走を作り、畫家を我が家へと招待した。畫家が來訪すると、彫刻家は例の美人をして酌をさせ給仕をさせた。畫家はこれは夢さら木彫美人なりとは思はず、其の美しさに見とれて恍惚たること多事。

日も暮方に及ぶと、彫刻家は畫家に一泊せよといふ。渡りに舟と喜んだる畫家は、直に之に應じた。人わるの彫刻家は例の美人を其側に置きて客に語るには、此の女を御側に侍らせば、一緒にお寢みなされと言ひおきて其まゝ座を退いた。寶の山に入りたる畫家が何條手を空しうして歸るべき。見ると例の美人は燈火の邊りに立つてゐる。一樹の蔭、一河の流

れ、袖振りあふも他生の緣、まあこつちへお出でなさいと、大時代の臺詞をいつて誘つたが、女は返詞をせぬ。はゝあこれはまだ未通女で恥かしいのであらうと進みよつて手を執らへると、之はしたり、何の事だ、木彫りである。さては計られたかと畫家は慚愧に堪へず、よしさらばこちらにも覺悟がある、敵討してやらうと、壁の上に己の像を描き、着物持物も一切自分のと同くものし、繩で首を絞めてぶらんこ往生をした姿を作り、蠅が口の邊に群つてる狀を畫き成して、戸を閉ぢ床下に隱れ、手ぐすね引いて待つてゐる。夜が明けると、彫刻家は畫家の失望面を見てやらうと、やつて來たが、戸が開いてない。そこで隙間から覗ふと、こはそも如何に畫家は

自殺の體、すは一大事と戸を蹴破つて飛び込みざま、刀を以て繩をふつり斫る。すると、ひよつくり床下から畫家が首を出してばあ。さては昨夜の敵討であつたかと彫刻家は大に閉口の體。畫家曰ふ、君が欺したから僕も欺いたのである、これで帳消しで御座ると。そこで兩人互にいふやう、世間のものゝ欺き合ひは皆な之と同樣であると、こゝに翻然大悟し、妻子眷屬を捨てゝ出家修行の道に入つたとある。

河成と工との話は畢竟するにこの佛教傳說の飜案である。今昔物語に傳へられた舊い傳說の中には此種のものが尠からぬ。單り今昔物語のみならず、傳說の中には此類のものが多い。太陽傳說や、羽衣傳說や、浦島傳說や、洪水傳說や、人身御供の傳說や、其他廣く行はれてある傳說ばかりで無く、特殊に傳はつた傳說の中にもかういふ傳說の流行は隨分有る。舊い傳說のみでなく、比較的新しいものにも此の如き傳說の流行があるから、これを史實として取り扱ふ事に就いては、餘程の研究を要する。印度からの傳來は勿論、支那からの傳來もあるし、朝鮮からの傳來もあるし、猶他の地方からの傳來もある、また內地に於て彼我流行したものもある。

第二十九　浪人氣質

伯夷叔齊のことは、史記の列傳第一に記述してある以外に詳かな事は見えてゐない。孟子の內に往々其性格に就て語つ

てゐる處もあるが、これとても極く僅である。武王周公を聖人とする支那にて、伯夷叔齊を絶賞して措かないのは、異樣な感じをするが、其の昂然として世俗の上に立つたといふことが、識者の賞讃を博したのである。孔子も伯夷叔齊のことは所々に之を賞めてゐるが、併し是は寧ろ伯夷叔齊の心事を臆測して、武王周公の爲に辯じて居るものと見られる。司馬遷が之に對して疑惑を挾んだのは尤もな事である。易姓革命の國で君を放伐するを寛假して視る支那で、伯夷叔齊を賞讃するは、自家撞着の樣であつて、實は易姓革命の國民性を最もよく代表してゐる。韓退之の如きは千百年にたゞ一人と之を頌してゐるが、全く伯夷叔齊は支那の理想人物になり了つ

た。丁度堯舜を理想の君主に造り上げたと同じ筆法で、伯夷叔齊は理想の浪人に作り上げられたのである。

易姓革命の國柄として代が替ると、一身を潔くする處士が出來た。言ひ換へれば高等浪人である。此の高等浪人は伯夷叔齊を理想として之に倣つたものである。かうなると伯夷叔齊は浪人の本尊で、浪人の開山となつた。獨り代の替はる時ばかりでは無い、一體に政變の多い國であるから、其の度毎に野處して身を潔くする者が多かつた。識者の仲間に於ては、かういふ行動を賞讃して、爭ひ之に倣はんとする傾向が出來た。今日の支那人はいざ知らず、古代の支那人は此の浪人氣質を其特色として誇つて居たのである。若し支那の國民性は

と謂へば、此の浪人氣質である。

孔子も高等浪人であり、孟子も高等浪人である。支那の學者の多くは此の部類に屬する。詩人文人にも此の種類が多い。よしや、宮仕した事があつても、書を著し、文を屬する時代は大概彼等の浪人時代であつた。伯夷叔齊が理想的浪人として持て囃されたのも當然である。

漢學の思想を通じて、此の伯夷叔齊氣質は澎湃として漲つてゐる。修身齊家治國平天下は漢學の本旨であつたが、之を書に著すのは、我が道の行れざるを以て、其抱負を見さうとするからである。畢竟、平生の抱負を後世に傳へようとするのである。けれども浪人の手に成つてゐるものであるから、

どうしても浪人氣質は活躍して篇中に現はれる。

伯夷叔齊の事蹟中最も大なるものは、此の浪人氣質であるが、伯夷叔齊は天下に對する大浪人たると共にまた自國に於ける浪人であつた。此點から云ふと二樣の浪人である。武王周公の新朝廷に慊らずして、浪人となつたのであるが、其以前には兄弟國讓りをして、孤竹の國を棄てゝ浪人となつた。卽ち國に對しても浪人となり家に對しても浪人になつた。此の兄弟國讓りといふ謙讓の美德も漢學の一部の思想を代表する。

伯夷叔齊ばかりではない、位に就かずして荊蠻の裡に遯れた太伯も、支那人の理想人物として崇拜したものである。孔

子も之を賞めて太伯は至德と謂ふ可き也と言つてゐる。畢竟するに此浪人氣質は清廉潔白で、一身の利害を顧みず、其の德を恪守するを理想とするのである。漢學の思想は此點にあると謂つてよい。

我が國に漢學の傳來したのは、應神天皇の朝であつたと云はれる。其時に傳來されたものは、論語と千字文とであつたと云ふことだ。今日傳はつて居る千字文は梁の周興嗣の選んだものであるが、應神の朝に傳來したものは其以前の鍾繇が作つた千字文であらう。周興嗣の千字文は此の鍾繇の千字文に次韻したものである。實際また此の論語、千字文が果して應神の朝に傳來したか否かも疑問であるが、我が歷史に於て

初めて漢字を修められたのは應神の皇太子菟道稚郎子であらせられたと記述されてゐる。此皇太子は長兄仁德天皇と位讓りをなされて、終に自殺し給はつたのである。當藝志美々命は弟の綏靖天皇を弑し奉つて位に卽かうとなされたと云ふ。上代御歷代の間には、兄弟位を爭ふことはあるが、互に讓り合ふといふ事は菟道稚郎子に於て初めて顯はれてゐる。歷史家によると、いろ〳〵と其間に揣摩臆測を逞しうするが、實は何等の證據もない。事實を其儘に扱つて、聊か揣摩臆測をすると、これは漢學思想の第一の發現でゞもあらうか。假りに論語を應神朝に傳來したものとすると、稚郎子はこれを御讀みなされたに違ひない。伯夷叔齊の事や、吳の太伯の事蹟

は、この賢明なる皇子の御腦裏に深く印象されたものと見える。位讓りの御發心はこれから起つたものではあるまいか。併し日本人は支那人と自ら異なる。支那の浪人氣質は消極的であるが、日本の浪人氣質は積極的である。單り浪人氣質のみでは無い、日本人の氣質は萬事に積極的である。伯夷叔齊太伯は國を遯れて其主義を守つたが、日本に在つては尙一歩進んで菟道稚郎子は身を殺して仁を成すと云ふ事をなされた。其の儘の模倣で無くて、遺憾無く日本の國民性を顯はしてゐる。

漢學の傳來は我國民性に影響はあつたが、我國民性は之を同化して日本的としてゐる。後年水戸義公が伯夷叔齊の傳に

感奮し、己れの子を樹てずして、兄の子に位を繼がしめたのみでなく、伯夷列傳に依りて修史の志を立て、遂に維新大業の一原因を作つた事は今更いふまでもない。伯夷叔齊の隱れた首陽山（西山）に因んで西山莊を造り、太伯の墓所に因んで梅里先生と稱し、支那人の國民性を代表すべき浪人氣質の象徴とも見るべき梅花を愛せられた事も今更いふまでもない。猶ほ又此修史の事業が消極的でなくて、積極的であつたといふ事は、日本人の同化力を示してゐる。

漢學思想に養はれた浪人氣質は積極的國民性に依りて我が國民の內に表はれ、到る處に活躍してゐる。本場の支那でも浪人氣質の純白なるものは、次第に鼠色となり、斑色となつ

たが、漢學から傳へられた我國の浪人氣質も亦同樣たるを免れない。自ら浪人を標榜する者は是を種に何ものか獲ようとするのである。抱負も、主義も、理想も、恪守もあつたものでは無い。浪人氣質は清廉潔白を第一條件とする。浪人道の衰へたること實に久し矣。

第三十　岡目八目

京都に行つた者は、電車のあるのを不平に言ふ。如何にも京都の舊い情趣を味はうとするには少からぬ妨害である。けどれも京都からいふと有り難くもなき不平で、京都に物質的文明を容れないといふ事になる。こんな迷惑なことがあらうか。進歩せずに昔のまゝを保存せよといふのであるから、京都を博物館の中に陳列しやうとするのと同樣である。外人の批評には往々斯いふ事がある。

京都が其の山水、其の舊文物を根本から破壞せざる限りは電車の敷設も、電燈の架設も、市區の改正も、已むを得ざる事である。但し京都には京都に對する調和があらねばならぬ。是が不調和になつたらば、それは根本的の破壞である。京都のみではない、耶馬溪に鐵道線路を布いたり、又は富士山に電車を布かうなどゝするのは、根本の破壞である。物質的文明を採用するには、言ふまでもなく調和が必要である。

外國人が日本の古畫を見て、之を絶賞するのはよい。今の

繪畫を見て日本の精神を喪つたとして失望するのは、誠に迷惑千萬な批評である。これでは日本の藝術を木乃伊取扱にしてゐるものだ。成程西洋とは根本に異なつてゐる日本の文物を見ようといふには、昔の儘の有り來りがよいかも知れぬが、それでは日本は亡國となる。さういふものが見たければ、博物館に行くがよし、舊家の所藏品に就いて見るがよい。國には生命があり、進歩がある。生命無き、進歩なきものは、古墳の發掘品同樣である。かういふ批評を有り難がつて聞き、我が味方と悦ぶ者は、自ら時代の落伍者たることを證明してゐる。

他國の文物を取りて之を同化して行くのは、其國の進歩で

ある。何れの時代でも其の時代の紀元を造るものは、其時代に新らしいものである。土佐の末流が振はなかつた時に、雪舟は支那の新らしい藝術を採用して新らしい畫を作つた。今日では舊いが其時代では新らしい。藝術ばかりでは無い、鎌倉から東山にかけての文物は餘程新しいものを採用したのである。東山は我が國民の趣味や、好尚や、文物やに對して一紀元を劃して居る。よしや其初めに於ては模倣であつたにした處が、久しからぬ内に同化されてゐる。此當時に於て新しかつた東山の文物藝術を見て之を賞讃するのはよいが、これに引き戻さうなどゝ企てるのは、抑時勢の進歩を心得ぬ所業である。

日本の國情をも詳かにせず、國家の進歩なるものをも知らず、我が文物藝術の由來をも知らぬ外國人から忠言を求めようとするのは絶對に間違ひである。我々は其人から其人の思想を聞き、其の人の識見を窺ふのは至極よい事と思ふ。我々に對して少からぬ裨益を與へるし、我々の見聞を廣める事が出來る。然るに我國情に就て、一知半解若くは全く解し得ざる人の忠言を求めて、それが何の役に立たう。

詩人の謂ふ所語る所は飽くまでも詩である。ケルネルの劍の歌や、文天祥の正氣歌や、祖國の歌、マルセイユの曲の如き、士氣を鼓舞し、慷慨激越するの詩歌もあるが、詩人の多くは調に哀愁多く、詞に悲愴のものが多い。詩人は荒れ果てた

古城の址に興味を持つが、新らしく築き成せる大厦高樓に向つて何等の同情も無い。詩人は物質的文的が嫌ひで、精神的文明に憧がれる。新しいものよりは舊いものに同情を寄せる。詩人に向つては、其言ふことを詩として聞くがよい。詩人からして經世濟民の術を聞かうとするのは、根本の間違である。況や亡國の詩人に於てをや。

タゴール翁の來朝は誠に線香煙火の樣であつた。何等の影響も、感化も殘らない。これは殘らないのが當然である。タゴール翁も恐らくは得る所が少かつたであらう。タゴール崇拜家からいふと、聞く程のものでもなき富士の山の感があつたらうし、タゴール翁からいふと、態々來朝するほどの價値

が無かつたかも知れぬ。有名な人は其著書や、言論によつて見た方がいゝ。昔の偉人でも今日會つて見たらば、案外につまらなかつたといふ感じもしやう。百年後に至ると大隈侯も案外に非常な偉人の樣にいはれるかも知れぬ。タゴール翁は日本人の內的生活を見る希望であつたさうなが、其當初の希望は少しも果さなかつた。横濱や、輕井澤に居ては、何の內的生活が知れようぞ。富豪や、女學生を通じて國民の內的生活が分るものでは無い。日本の古文明を憧憬した翁が京都にも行かず、奈良にも行かず、其僧房生活や、國民の信仰を見たいとの希望を實現せずして、永平寺にも行かず、寺院にも行かずしては、日本の古文明に對して、瞥見者とまでゆかなかつた。これでは定めし翁も不本意であつたらうし、日本國民も氣の毒な感がするし、殘念にも思ふ。

翁は日本人が英語を解する力の微ない爲に、其の言ふ所を誤解してゐるかの樣に言つてゐるが、辭令に巧な、詩の樣な翁の講演は其儘に英文で傳はつて居り、また誤らずにも譯されてゐるから、決して日本人は翁の思想を誤解して居らぬ。實をいふと、翁の思想よりは、我が國民の思想の方が遙に進歩してゐるのである。翁が何等の影響も感化も、遺さないといふのも此の點にある。併しこれは日本の學者や思想家も惡い。翁と此種の人々との接觸は絶無であつたではないか。翁に對する我が學者の態度は、もう少し深切に、眞摯であらね

ばならなかつたと思ふ。翁に對して我が國情を視察するに便宜を與へ、之を指導する方法を執つたならば、翁の爲にも幸福であつたらうし、我が國の實情を其詩料に供する事にもなつたらう。唯一ツ翁が得たるものは、我が藝術界から受くべき大なる力である。今後印度藝術に及ぼす感化は定めし多大なものと思ふ。此點からいふと翁の來朝も決して徒爾では無かつた。畢竟、翁と我が國との接觸は藝術によつて行はれたので、藝術方面を除いては何等の接觸が無かつたと云つて差支がない。かういふ世界的人物の來朝も今後往々あると思ふから、獨り藝術家のみならず、學者始め凡ての智識階級の人が、彼我の爲に相互に指導啓發して行くやうな道を執つたならば宜からう。之は彼人に對しての禮義でもある。唯無暗に感服したり、惡罵冷嘲を浴せるなどは、兩つとも中庸を得た道でない。

第三十一　英一蝶

京都はどうしても歌の都である。古今集新古今集の都である。我がたつ杣の比叡山、祇園精舎の鐘の聲、嵐の山の秋の暮、千鳥友呼ぶ鴨川、紅の森、鳥邊野、眞葛ヶ原、鶉啼くなる深草、吳竹の伏見、いづれも歌枕の名所舊跡ではあるが、必ずしも古典的の因襲ばかりではない。尤も小原女が電車に

乗つたり、三本木に一品西洋料理の大々的看板を見る今日であるから、京都の古雅優美な點も次第に破壞されたには相違ないが、一體の空氣が、しつとりとして、落着きがあつて優にやさしい處がある。一面に立て籠めた靄が、朝日の光に溶けて、次第に三十六峯が姿を現してくる風情や、春雨しめやかに木屋町の柳が烟る趣やは、四條派の畫であると同時に、歌其儘である。之に比べると、東京は江戸時代からどうしても俳諧の町である。歌は衣冠束帶のものにあらずんば、隱者騷客のものである。俳諧は市井のもので、一變すると、附合にもなり川柳にも近くなる。雅致以外に雅致なく、風流以外に風流のないのは歌であるが、俳諧は俗中に雅を求め、騷がし

いうちに閑天地を目つけようとしてゐる。俳諧それ自らには多少の滑稽趣味を藏して、不調和のうちに調和がある。俳諧は嘗て大阪に盛であつて、俳諧國の春は咲くや此花の浪華の專有物であつた。芭蕉の山林的氣分は俳諧に一大變調を與へたが、それでも江戸に入ると、本來の市井的氣分を帶びて、江戸座となつた。歌は床屋や前垂掛には不似合であるが、俳諧になると、寧ろ此うに云ふ連中にふさはしい。

であるから、蕪村以來、京都の畫家、取り分け四條派の畫家は往々にして俳畫を描くが、滑稽の氣分を帶んだ、飄逸な點には乏しい。どちらかと云ふと、品が善過ぎるやうに感せられる。そこへ往くと、江戸の畫家の方が、俳畫其ものに最

も適應した筆致性格を有してゐるやうに思はれる。之は風土の影響が少からずあることであらう。此種の畫家のうちで最も代表的なのは英一蝶である。色白で物言が靜かであつたと云ふのはちと江戸ッ子式の容子ではないが、目が大きく、すさまじくとある點は、隨市川の團十郎張である。性得欲深いとの評があるが、之はどうやら當にならぬ。近世叢語に依ると、

英一蝶、人となり、豪放なり、市に奇古の石龕あり、諸侯爭ひて之を買はんとす。一蝶卽ち馳せ往き、囊を傾けて之を取る、又新茄子を鬻げるを覩、亦高價にて之を買ふ。是に於て毎日石龕に火を點じて茄子を噉ひ、傲然として人に

謂つて曰く、此れ乃ち天下第一の歡樂。

と、あつて、まことにいゝ氣なものである。又異曲同工の話が傳つてゐる。

一蝶有馬家の好にて、舞樂の六尺屏風一雙申付けられ、其料として、金二百兩給はり候を、歸る道にて、奇石を買ひ候て、宅までに百兩遣ひ候由。

此等を見ると、宛然たる江戸ッ子氣質、性得欲深說を打消すに足りる。竹本五兵衞と云ふ人の咄に斯う云ふ記事が見える。

一蝶御赦免ありて歸りし後、私祖父世話致候て、近所、深川靈巖寺門前に宅を求め候て、そこに一蝶を住はせ候由、自分宅は六軒堀にて、道具商賣致居候へども、殊の外のあ

い口にて毎日一蝶の方へ參り咄し居候由、歸島の後、猶又殊の外繪流行致し、毎日諸方より魚等の到來候事夥しく、喰餘りめづらしからざれば、魚賣共三人出入有りて、各半切桶を置き、水を汲み入れ置き、到來の魚半切へ打込候と、やれ今度は己れが半切なりとて、悦び引揚持行く、後日に魚の來らざるとき、禮に代りの魚を納め、又は、外の品などにて禮をせしとぞ、大きく廣き臺所にて青物うり其外、其邊を商ふもの共、食事の時には勝手に來りて食ひけれども、さらに構はず置きけるとぞ、其隣に狩野梅笑住居けれども甚ださびしく火の消えたる如くにてありしと。

其の盛にして手廣く物に拘泥しなかつたのは、どこまでも江戸ッ子式の本性を現してゐる。又同じ竹本五兵衛の物語に、

一蝶自分の宅へ歸りし後、ますゝ繪を求むる者多く、諸侯等より厚き幣物を贈り、さまゝの繪賴ありしかども、氣にむかざればいつまでも捨置き書かざりしかば、家内の者より五兵衛方へ密に其事を告候へとて、何ぞ筆をとられ候樣計策賴候由申來候へば、其時五兵衛參候て、其頃諸侯より賴來候繪樣をかねて聞置き、さて何々の繪圖は、つひに見たる事これなし、いかゞ致たる圖に候哉と、申す時幸ひ此節外よりも、其圖を賴み參りたれば、今書いて見申さんとて、筆硯をとりよせ候へば、斯樣々々と咄しながら畫

いて見せ候由、誂人の繪忽ち出來せしとなり。

とあつて、名人氣質が見えて、嬉しい。

若かりし時あだし仇浪のよるべに迷ひ時雨朝がへりのまばゆきを厭はざる頃と自ら四季繪の跋に述べたやうに、一蝶は道樂者であつた。又權家富豪の取卷をもして、盛に遊里に足を向けた時代もあつた。紀文の取卷もする、奈良茂の取卷もする、佛師民部とともに井伊伯耆だの本庄安藝守だのゝ取卷もする。一蝶は隆達節をよく歌ひ、又小歌をも作る才筆があつたから、取卷などには持つて來いであつた。其角なども盛に紀文の取卷をしたのであるから、一蝶が取卷であつたとて、不思議はない。つまり取卷を引き連れて、好んで豪奢な遊興

をしたる此種の權門富豪は或意味に於ける文藝の保護者であつた。一蝶の作つた小歌のうちでも、世に廣く行はれたのは松の葉にある朝妻舟である。すべて四段あつて一蝶の才筆のほどが窺はれる。朝妻舟の「あだしあだ波寄せてはかへる波」とあるは、六百番歌合にある後京極攝政の、「誰となくよせてはかへる浪枕」とある歌、新續題林の實蔭卿の「あだ波の枕さだめぬ河岸に」云々の歌に基いたることは明かである。近世奇跡考に、

一蝶若かりし時、友人なるひと、都よりの土產にとて也足軒通勝卿、船中妓女といふ題にて、このねぬる、朝妻船のあさからぬ、契りを誰に又かはすらんと、自ら遊したる短

冊を得させしを喜びて祕藏せしが、ある年近江の彦根にいたり、こゝかしこ名所見めぐりけるうちに、朝妻舟(近江國坂田郡)の古跡にめとゞまり、通勝卿の詠歌を思ひ出して、懷舊の餘り、やがて、彼朝妻船のかたを畫き且朝妻船といふ小歌をつくりけるとなむ。

と云ふ說を傳へてゐる。

一蝶作るところの小歌は多く花都と云へる盲人が節をつけた。又或大名の前で、神田鍋町に住んでゐた市川檢校の絲にて、一蝶が朝妻舟を歌つたと云ふことだ。一蝶が隆達節をいたく好んでゐたことは、彼れが畫いた隆達の肖像があつて、其傍の色紙に隆達自筆の小唄を載せてあるものがあるさうだ。

其小唄とは、

こはだ、山路に行暮て、月を伏見の草枕。
いつもみたきは花の夕榮、雪の明ぼの、須磨や明石の月と
君よなう。
草の名は惜けれどなむぞ、忘草はなう。
思案してしよぞ、物々し、思案しもせで。
月はえせもの、忍ぶ其夜に猶冴ゆる。

一體に文學の嗜みがあつて、おまけに小唄を作り且つ歌に堪能であり、それで畫が巧いと來てゐるから、元祿の頃一蝶がもてたことは思ひやられる。

英流の系圖に依ると大阪の產とあるが、勢州龜山の產で、

父は石川主殿頭の醫師多賀白雲と云ひ、醫師の傍、劍術の指南をもしたと云ふ説がある。又一説には承應元年、攝州に生る、父を多賀伯庵と云ひ、某侯の侍醫であつたとも見える。多分父は勢州龜山侯に仕へたのであつたが、後に攝州に移つたのであらう。幼名は猪三郎、後に次右衞門又助之進と呼び、名を信香、一に安雄と稱する、剃髪して朝湖と云ふ。翠蓑翁、牛丸、曉雲堂、舊草堂、一蜂閑人、一閑散人、隣樵庵、隣濤庵、北窓翁の別號がある。俳號は曉雲、又和央と云ふ。十五歲の時、父とゝもに江戸に來り、畫を狩野安信に、書を佐々木文山に學んだ。元祿十一年十二月、吳服町一丁目新道に住んでゐたが、盛に花街柳巷に出入し、大盡舞にも「附き添う

たいこは誰々ぞ、一蝶民部に角蝶や」と歌はれた如く、太鼓取卷をしてゐるうち、諸大名を誘惑して道樂をさせたとの罪で、伊豆の三宅島に配流せられ、後八丈島に移され、謫居にあること前後十二年、寶永六年九月、赦されて歸り、英一蝶と稱し、北窓翁と號し、深川長堀町に住し、享保九年正月十三日、享年七十三歲にて歿した。芝二本榎承敎寺塔中顯乘院に葬る。法名は英受院一蝶日意、辭世は「まぎらかす浮世のわざの色どりもありとや月の薄墨の空」と、どこ迄も畫家である。

元祿の頃上方には絕代の天才尾形光琳があつて藝術界に一新旗幟を樹てたが、關東では一蝶を以て畫壇の代表者とすべき

である。一蝶には光琳の偉大なく光琳の豪華はないが、飄逸逸宕の趣は其特色であつた。光琳も狩野安信に學だとか云ふ説もあるが、彼は狩野に甘せずに直に古土佐の繪を研究した。土佐の末流に着目せずして最も古い最も美しい土佐の眞髄を捉へんとした。宗達光悅の行く道を喜び、遂に之を集大成せんと企てた。而して光琳は成功し得たのである。一蝶は安信の門にありて殆ど師の壘を摩するの域に入つたが、更に其輕妙なる筆致は、市井の百態を寫し、滑稽奇拔なるものを描くを喜んだ。けれども彼は狩野派より蟬脫して更に高處に着目するには至らなかつた。天禀の異る點もあらうが、一蝶が光琳に及ばざるは此ためである。一蝶は芭蕉の門に遊び、其角

嵐雪とも友とし善く、嵐雪の其袋、溫故集などにも其吟を殘してゐる。蕪村は天明俳壇の盟主たるだけに其南畫の才を以て好で俳畫を畫たが、彼の南畫が支那流の南畫なるが如く、彼の俳諧も漢語を巧に取り入れ、支那の故事を讀み込み好で歷史を題材とした。從つて其影響は俳畫にも見えて、彼の俳畫は南畫的俳畫で、俳趣味の俳畫でない。そこへ往くと、よしや生れは上方でも江戸育の一蝶の畫は、俳趣味の繪畫であつた。鳥羽僧正の戲畫は戲畫ではあるが、俳趣味には乏しい。一蝶の畫は俳畫ではないが、俳趣味は饒である。狩野派から出て狩野派にはふさはしからぬ俳趣味の畫を作つたと云ふことは、一蝶の性格にも依らうが江戸の感化である。江戸の天

地は俳諧の天地である。今日の東京を見ても何となく俳諧じみてゐる、五節の舞だの市井士女の躍りあるくだのは、流石に古典的な京都の身上である。藝者行列が馬場先門外での悲喜劇はどうしても俳諧的東京の餘興と云はねばならぬ。そこには警察の不手際もあり、彌次馬の飛入もある。

第三十二　奈良茂

古へ吉原に流行した小唄に大盡舞と云ふのがある。之は二朱判吉兵衛の作と云はれてゐる。二朱判吉兵衛とは道化役者の名人中村吉兵衛のことで、小男ではあつたが、藝の位が上吉にまで至つたから、其頃乾金の二朱判が形は小いが位がよ

かつた、それに譬を取つて、二朱判と云ふ渾號を得たと云ふことだ。明和二年八月十六日八十餘歳で歿したとのことであるから、大抵其時代は分る。此男は俳諧をもやつて、文字もあり、俳名を一其と稱した。しかし此大盡舞はまことは、此吉兵衛の作でない。大盡舞考餘に「大盡舞の唱歌は二朱判吉兵衛が作と云ふは誤りなり、されど今さら改めがたし、この正本近代まで繪草紙屋にて賣りたれど、紙高直によりて、當時見えず、紙數僅か七枚綴、板元は永代橋北新堀いせや平兵衛と記して誤脱の處もあり、然れども據とするに足れり」とある。此小唄のうちに當代の豪客紀文と竝べて、「扨其次の大盡は奈良茂の君でとゞめたり、新町にかくれなき加賀屋の名

とりに浦里の君さまをはじめて是を身受する、深川にかくれなき黒江町に殿を建、目算御殿となぞらへる、附添ふたいこはだれ〳〵ぞ、一蝶民部におようなり、小四郎善六吉兵衛、おそばさらずの清五郎、軒もる月のすがれにや、嵐喜代三を身請する、ハアホ、大盡舞を見なさいナア」とある。

奈良茂の豪興は紀文と相對し、雙々相執りて下らざる江戸時代の通客であつたが、大盡舞考證に、「靈岸島に住す、奈良屋茂左衛門、親は材木の小揚人足にて茅場町柏木某が家を滅して俄に分限者となり、世に名をふるふ、嗚呼、不人なるかな、三代にして家絶す、劇場に、髭の意休といふは此奈良茂が父のふるまひを取り入たるものなるべし、寺は深川靈岸寺、初

代奈良屋茂左衛門、剃髪して法名宴休、二代、同茂左衛門、上方にて浮名を流す、實子にて早世、三代同安左衛門、二男、後に家督相續」と見え、江戸眞砂六十帖を始め、諸書に小傳逸話を留めた外には、從來確かな事蹟が傳はつてゐない。往年余が『紀文と奈良茂』を稿した時にも、此等の諸書に依りて考證したに過ぎなかつたが、近年發見せられた奈良茂家の世襲遺産分配の遺言狀及繪圖等に依ると、此等を補正するに足りる。

奈良茂は神田氏で、其祖先は近江の國神田村から出たのである。江戸に引き移つた初代の茂左衛門は靈岸島に住居して正保二年六月五日歿してゐる。奈良屋の家號は何に基いたか

明かでない。二代目の茂左衛門は初代の二男で、貞享九年十月八日、五十九歳で歿した。三代目は幼名小助、後に半兵衛家を繼いで茂左衛門と稱し、剃髪して江雲と號したが、至つて病身のところから、家督を弟の源七に讓つて、元祿十年七月十二日、四十三歳で歿した。此源七は四代目の茂左衛門で此人の時に分限者となつたのである。

此人、剃髪して安休と號したが、商賣は材木業で、御用材木商柏木傳右衛門の奸を發いて、遂に取つて代り、本宅は深川の黒江町に建て、靈岸島を隱宅として其妻おすての住居とした。深川に繁森町と云ふのは、此奈良茂が願立てゝ開いたので、茂右衛門の茂の字を取りて町名に冠したと云ふことで

ある。尾州侯に出入して木曾山の材木を買取り、非常の利益を得、尾州家よりも用金を仰せ付かつた。正德四年六月十三日、五十二歳を以て歿したが、餘程思慮周密の人であつたと見え、其歿する年に財産分配の遺言狀財産目錄等を作つてゐる。之で奈良茂の分限加減が分明である。

其狀は「お捨方、茂左衛門方、安左衛門方遺言狀、正德四年二月二十九日相改家屋敷竝有金貸金唐物道具讓申遺言狀」と題してある。

一金三千兩　妻おすて方へ
一金七萬五千六百二十五兩一分　惣領神田茂左衛門方へ
一金六萬四百七十五兩一分　神田安左衛門方へ

と分配して、一々明細に記してあるが、現金よりは多く地面家作である。

猶其遺言狀の終には諄々として訓戒を述べてゐるが、流石に一代の富を作つたゞけのことはあると首肯される。

一、此外に親類方へ譲狀一枚手代共出入者共譲狀一枚書置申候、是は各々三人に譲申候高ばつと爲知申候事いやに候故如此に候、隨分互にあいさつ能ざらましく可仕候、沙汰無之樣に心掛第一に候、金銀有所帳面共多兵衛のみ込罷在候是又沙汰なしに爲申聞身に可被致候、目惡敷罷成候故、近年帳面有増太兵衛存罷有候帳付させ申候、隨分心體見届け能者と存候、外へ當りさはり無之樣に此者にはなし申さ

れまじく候、此後いか樣に罷成可申も難計候へ共、只今迄實に候ゆゑ此段外へ御申候はゞ當りさはり罷成可申御心得第一に候。

一、兩人身持第一おごり無之樣に著類共に絹紬木綿類著料可致候、かならず〳〵御法度著類用申間敷候、唐物著申間敷候、母並に親類共大切に可致候、大分譲骨折不申請取被申候上めやかにつき不申樣に遊山箇間敷事一切仕間敷候、普請等住居かならず〳〵かたくひかへ可致候、冬木事何も存申可候上は油斷有之間敷存候へ共、若き者に候故くれぐれ氣遣申置候。

一、親類共へ見分金子相譲申候故此後合力致候に不及候。

一、一七日過候はゞ親類共家來共迄遺言通可申渡候、尤可渡物遺可候事。

一、存生内より申渡候通何樣の事にても商仕間敷候、手代共内よりすゝめ申候へ共一切店商事竝金銀出樣申間敷候、店先にて過半延申候事に候。

一、茂左衞門は本家に罷成候へ共上下二十人至極にて、子供出來候て二十五人より上ぐらし仕間敷候、安左衞門は惣領にじゆんじ十六七人二十人より多き人數ぐらし仕間敷候、尤店先がし金利兩樣高見申候はゞ大分樣々可存候へ共火難と申事有之候故入金半分づゝ延し申樣に心掛第一に候、右樣無之候へば子孫續可申事に候。

一、我等存生候通むざと致候者出入爲致間敷候、世見大切可仕候、自分々々わが儘堅仕間敷候、手代共相談上申候事我等申候と相心得能事用可申候、遺言狀仍如件。

文中間々不解の所もあるが大概は事分明である。又此遺言狀にある通り、家來共方家屋敷金子讓置覺と云ふのがある。家屋敷三箇所代金〆此金千六百四十兩、金子にて相渡し候分此金高二千兩とあつて、各々への分配額を明記し、其末に、

右之通何もに讓申候、兩人は子供大切に可致候、平六傳八多平喜八利兵衞外より者傳三郎五郎兵衞立會兩人之子供身持之儀相談可致、我等存生之通に可致候、自由がましく爲致申間敷候、平六儀者毎々より前書にも印候通諸事身持大切

に致、兩人之子供方に立會相談相手に罷成可申候、喜八者安左衛門へ附添、大切に相勤可申候、平六傳八多平喜八利兵衛相讓候、家屋敷金子共に元之證文者二心致間敷ため茂左衛門方に預り置可申候以後に茂左衛門相談上身上がため候時分茂左衛門より相渡可申候、店質金幷に利息之義者銘々へ請取裝類小遣等遣相殘りのばし申樣に可致候仍如件。

目算御殿などの名にも似ず、其邸宅も今日の紳士縉商のやうな宏壯なものではない。

品々道具出控帳を見ると、茶器類には大分珍品もあつたらしい。幅物のうちには、雪舟の蘆雁だの、山水だの、鍾馗だの、趙子昂の馬だのが見えるが、眞贋は如何であらう。其他

は狩野派の物が多いが、格別大したものもないやうだ。とにかく此四代目は全くの金溜屋で決して紀文と豪遊を競ふやうな人ではない。して見ると浮名を流した奈良茂は、何代目かと云ふと、四代目の後繼者なる五代目である。

亡き父に奢りたかぶることを嚴禁されたのも水の泡で、此五代目は大盡舞に歌はれたやうな通人となつたのである。五代目は幼名與之助、俳名を泰我、茶は宗偏流で、茶道の名を宗里と云つてゐる。恐らく里の一字は愛娼浦里の一字を取つた惚氣筋であらう。享保十年九月三日三十二歳で夭死をして ゐる。大盡舞考餘に二代目上方にて浮名を流す、實子にて早世すとあるが如く、如何にも早世してゐるけれども、大盡舞

の本家は宴休(安休)ではなくて、此人である。江戸眞砂六十帖に、「兄茂左衞門氣質大きに活成ゆゑ名代の率頭數多召つれて吉原へ入り込、又は堺町葺屋町へ晝夜に限らず遊びに長じて吉原は中萬字屋玉菊に通ひて大酒を呑、玉菊も大酒にて病氣付て次第に重りて茂左衞門情力を盡し療治申付候が終に病死しぬ、是を以て元祖の河東淨瑠璃にして、名題をうかむ瀨というて、今において耳になれる、それより新町加賀屋浦里に馴染て請出して名をおるんと呼ぶ、部屋住なり、上方へ率頭抔大勢召連て登り、七月許り逗留して京大阪の遊里にのぞみしが上方にては惡敷いひて噂よろしからず、穢多乞食の頭と評判したるよし其節の役者のはなしなり、道中より病氣付三十一歳

にて病死す」とある。しかし、此うち玉菊の話は奈良茂とは緣がない。玉菊の歿したのは享保十一年三月二十九日のことであるから、奈良茂歿後一年の出來事である。浦里のことは大盡舞にあるから、眞實に違ひない。吉原雜記に「奈良茂或時友達相方のもとへつき合にて行とて、蕎麥箱たゞ二つもたせ行きけるに、あまりに輕少なる故、彼友達其外まで蕎麥をたづねけれども、其日一日は前より申付、吉原五町山谷田町其外近邊の蕎麥屋殘らず買上、たゞ二つの蕎麥を持行趣向に奈良茂が皆買上し故一向なかりけりとなり」とあるにても、奈良茂の遊興の工合が分る。弟の安左衞門は亡き父の遺言を守つて、始末を第一とし、書畫骨董を愛してゐたが、兄の死

後には又々放埒三昧を事とし、堺町に遊び、竹之丞座の金主となつて役者と附會し、藝人を集めて、金びら切つての大盡風を吹かした。その結果は家屋敷を駿河町の三井家に渡すことゝなつた。世系に「別家して深川佐賀町の裏通り中川町住宅、此地面駿河町三井に賣(當時は夫より新右衞門町川村へ賣候由なり)靈岸島湊橋向箱崎町一丁目四方屋敷安左衞門樣所持候所、是も駿河町三井に讓り、當時三井所持なり」と見えてゐる。江戸眞砂六十帖にも「箱崎町一丁目四方屋敷も一萬五千兩の估券なるを駿河町越後屋へ書入にして利金滯りて公邊へ訴出る、是を悲しみ平井の聖天へ斷食して七日の參籠、無間の鐘は知らずいかなる神にも俄に大金を降らし給ふべきや、

終に越後屋の物となり、是を悲しみ一箇月許り引籠りて悲傷せしは愚成るなり」とある。奈良安は明和三年七月三十日歿したが、享年は明かでない。六代目は淺草黑船町鈴木伊兵衞の伜で、奈良茂の後を襲いで源七と稱した。畫が好きで掉舟齋と號し、又歌を好み、細工に妙を得て、器用の人であつた。寛政三年六月一日、八十歳で歿した。七代目も養子、深川六間堀坂本氏の子で高嵩谷の門人嵩月の弟、畫を好みて、榮保齋と號し、文政八年八月十五日、六十六歳で歿した。八代目も養子で、源次郎と云ひ、九代目は其次男、十代目は三男が順養子となり、千住掃部宿で小間物屋を開業し、明治十六年家督を伜榮藏に讓つて隱居した。奈良茂には子がなく、奈良

安の後も絶えた。中川町沒落後、妻おみなは淺草三間町に在つたが、召使の下男彌八と云ふもの至極實體にて、後に在所なる草加宿に引込みたる折、奈良屋と云ふ家號を遺し同所一丁目に奈良屋庄助と云ふ米商賣を致し、慶應三年の頃まで猶綿々としてつゞいてゐたと云ふことであるから、今もまだ絶えずにあらう。

第三十三　左甚五郎

必ずしも我邦ばかりではない、どこの國でも政府に時めいた人の傳記事蹟は割合に善く殘つてゐるが、野に在る文藝家などの傳記になると、つひ近世の人でさへも甚だ明瞭を缺いてゐる。儒者學者の傳記はそれでも其門下生に依り、若くは

同學の士に依りて記されてゐるが、小說家であるとか、戲曲家であるとか、又は藝術の士になると、一向に其正しい傳記を傳へてゐぬ。あれほどえらい、紫式部や淸少納言の傳記でも、數行ぐらゐの文字より外にない。紫式部の本名さへも明白でないではないか。近世の井原西鶴にしても、近松門左衞門にしても、其傳記は寧ろ甚だ朦氣である。シエークスピヤの傳記さへも異說紛々として定かならぬ。中には或大作が世間に傳はるが如き一人の手に成つたのでなく實は數人の手だなどと云はれるやうな文學者もある。甚だしいのになると、其人の有無さへ、疑はれるものがある。

藝術家の事蹟になると猶一層甚だしい。ヴアサリの伊太利

畫人傳などは、善く藝術家の事蹟を傳へてゐる方であるが、其後の研究に依ると、誤傳だらけで、中々に信じ難い節が多いと云はれてゐる。日本の土佐系圖などは殆ど信用し難いもので、土佐派の畫人を研究するのは大仕事と云はねばならぬ。土佐ほど古くなくつても、東山時代の畫家には、有無さへ疑はれる人がある。曾我秀文などは畫史中の難物である。必ずしも足利時代に遡ぼるを要せず、岩佐又兵衛にしても、頗る貧弱の材料より外に傳はらぬ。浮世繪の作家中には其作品が遺つて、作家の事蹟が皆目分らぬのが少からずある。

けれども畫人はまだ成書だの、斷簡零墨などが傳はつて、不完全ながらも其事蹟を傳へてゐるが、建築家や彫刻家や工

藝家になると、殆んど名ばかりで、其鄕貫さへも不明なのが多いと云ふよりか寧ろ、比々皆然りと云つてよろしい。佛師の如きは、彫刻界に名聲嘖々たるものでも、其事蹟は一切不明である。其人の作品と云はるゝものさへも、果して然るや否やを疑ふものが多い。古佛像となるとすぐ運慶の作である と勿體ぶるが、其の運慶の正眞正銘の作があるかどうか、頗る疑問と云はねばならぬ。左甚五郎の如きも、其作品と云はれるものゝ往々に存在するが、しかし甚五郎の事蹟は全く雲漠々、其作品と云ふものも、果してどれが甚五郎の作として信ずべきや容易に判明し難い。同じ甚五郎の作と傳へられてゐるもののうちにも非常な優劣がある。甚五郎の名が高いだ

けに僞甚五郎のものが多く、いづれが眞いづれが僞かは誰しも之を明確に云ひ得るものがない。

平安朝の初に、飛驒の工と云ふ建築の名工があつて、當時の有名な畫家百濟河成と技の優劣を爭つたと云ふ話が今昔物語に出て、甚だ名高いのであるが、前にも云ふ通り之は雜譬喩品の『木師畫師喩』の換骨奪胎で、少しも信用が出來ぬ。藝術家の逸事としては、斯う云ふやうな、話の作り換へが多い。巨勢金岡の畫いた馬が夜な〳〵萩を食ひに出たの、狩野元信の畫いた雀が拔け出したのと云ふ類は非常に多い。之は日本ばかりではない、希臘などの藝術史にも類型のものがある。左甚五郎の作と云はれるものも亦斯の樣な逸話を多く傳へて

ゐる。古今の名匠の話は殆ど甚五郎の一身に集まつてゐるやの感のするほどであるが、それでゐて此甚五郎の正體と云ふものは、全く分らず、雲霧の裡に閉されてゐる。

一體此甚五郎はいつの人やら、それからが第一の疑問である。次にはどこの人だか不明である。又其作品にどんなものがあるか、全く五里霧中ではあるが、一つ諸書に依つて小手調をして見よう。

野史と云ふ書物は、大日本史のあとを獨力で繼いだ其根氣には敬服するが、隨分杜撰な書と云はねばならぬ。此書には左甚五郎は播州明石の人で、其母が摩耶山に祈つて、四十八歳の時始めて妊娠して產んだと云つてゐる。杜撰と云ふ前觸

をしたゞけ、容易には首肯され難い。しかし播州明石の産と云ふことは、野史ばかりでなく、諸書に散見してゐる。名人忌辰錄にも、播州明石の人とある、歌俳百人選にも同地の産と見える。して見ると此說は中々に流布の範圍が廣い。之に對して讃岐の高松生れと云ふ說がある。又紀州の根來と云ふ傳說もあり、又飛驒に生れたなどゝ云ふのもあるが、之は飛驒の工から思ひついたさかしらごとで、固より根なし草に過ぎぬ。然らば左甚五郎の生國はと云ふと、近來は讃岐國高松と云ふのが、一番信用されてゐる。其墓所と云ふものが、高松市寺町の地藏院にありと云ふことであるし、又其子孫と稱するものも同市に住してゐると云はれてゐるが、果して其眞

僞はどうであらう。なぜならば甚五郎の時代から推して、其子孫が今日まで連綿と殘つてゐるかどうか。

此高松生れの一說として、甚五郎は舊松平家の家臣木具屋和六の男と云ふ說がある。諸書に寛永十一年四月二十八日に歿す、享年四十一とあるが、之に從へば德川初世の人たることは明かである。けれども此說とても基だ疑はしい。なぜかと云に、甚五郎は桃山御殿、聚樂の第に彫刻したと云はれてゐる。之に從へば文祿頃の人らしい。或は文祿から慶長頃にかけての名工であるとの說もある。寛永十一年に四十一で歿したとすると、文祿頃の所生で、豐太閤の豪華を飾ることは出來ぬ。一說には寛永

十一年七十一で歿したとも云ふ。すると、文祿頃は三十歳ばかりで、文祿慶長頃の名工として差支がないが、寛永十一年説も確實なる説とは云はれぬ。けれども桃山時代からかけて、徳川初世に在世したと云ふことは畧信用するに足りると思ふ。又たその名の喧傳したところから見ると、或ひは早世したのではなくて、割合に長命を保ち得たかも知れぬと云ふ説も起る。

高松に生れたと云はれる彼は長じて四方に遊んだと云はれてゐる。それから遂に居を山城の伏見に卜したらしい。播州明石に生れたと云ふ説が多く傳はつてゐるのを見ると、明石にも在住したことがあつたかも知れぬ。歌俳百人選に、「しか

も其性無慾にして貯へつきざれば業をなさず、身は極めて貧なり、或時隣の主これを諫めしに、甚五郎笑つて、

たのしみは貧しきにあり梅の花

其後山城國伏見の里に移り住み、寛永十一年四月二十八日卒す、四十一歳なり、其子を左宗心と呼び、三代目は左政勝と號す、京今出川寺町に住み、父子三世とも此道の名譽なりとあるが、此俳句は果して甚五郎の作であらうか、又其子孫の系譜は如何であらう。此書にある家譜は近世奇跡考に云ふところと略同じである。奇跡考には斯うある。

佛殿山門等の彫物古雅なるは、來由正しからざるもみだりに左甚五郎が作なりと云ひて、名譽高しといへども、いづ

れの時代いづれの所の人と云ふこと詳かに知る人なし。予其譜を得て始めて時代を知る、左の如し。

左甚五郎　伏見人、寛永十一甲戌年四月二十八日卒、四十一歳

左宗心　元祿十五壬午年三月十五日卒、七十一歳

左勝正　今出川寺町住、享保十二丁未年五月十三日卒、

以下略

元祿三年板人倫訓蒙圖彙に、天正頃、左、と號する名人あり云々。

龜文翁云、左甚五郎は關東には不來、播州明石に住けるとなり。

伏見に住で伏見に歿したとすると、高松の墓所もちと考へものではないか。歸葬したのだと云へば云はれるものゝ、其子もどうやら伏見住らしいし、其孫は京住居とあれば、高松に歸葬する筈がない。斯う云ふやうに諸書を渉獵して、其異同を調べると、やはり元の杢阿彌、甚五郎は一切不明の人となつてしまふのである。

其傳の不明はまだしも其作品は甚だ不明である。左甚五郎と銘したり、左甚と銘したり、甚五郎と銘したのを見ると、非常に優劣がある。銘に種々あるが如く、其作もまち〳〵である。するとどれが果して正眞正銘の甚五郎の作なるか、甚だ取りとめがない。或は代々甚五郎と名乘つたかも知れぬ。

寧ろさう解釋した方が判斷がつきやすい。又高松藩に仕へたと云ふのは其子孫で、やはり甚五郎と稱してゐたところから初代甚五郎をも高松を以て其生地と呼んだのかも知れぬ。地藏院だの、高松築地町一淨院にありとか云へる墓は、高松に移り住だ甚五郎の墓でありはしまいか。すると高松生れの說は之れ亦不正確になつてまふ。左甚五郎の左は苗字であることは略察するに難からぬ。本姓伊丹氏などゝの說もあるが、之は固より正確の出所がない。

足利氏の季世は門閥打破階級打破の世であつて、裸一貫から一國一城の主となつたものが少くない時代であつた。其の尤なるものは豐太閤であるが、必ずしも政治上のみでなく、

あらゆる階級を通じて、斯う云ふ現象があつた。藝術界に於ても古き土佐派、永らく我が畫界の覇權を握つてゐた土佐派が萎靡振はずなつて、之に代つて、新しい生命ある畫の作者が崛起した。太閤の豪華好きは、安土時代につぐに桃山時代を作り、新藝術の巨匠をして時代を飾らしめたのである。此等新藝術の巨匠は門閥家でなくて、いづれも時代の精神を會得し、其手腕をもつて、之に適合する藝術を作り出したのである。左甚五郎は一平民に過ぎぬ。官もなく、位もなき一平民である。けれども時代は眞の力ある平民を歡迎した世であるから、彼は又桃山時代を飾る一の藝術家として立つたのである。門閥なき階級なき平民の勢力はついで江戸時代に及ん

だ。此間に左甚五郎の藝術が時代の讃美するところとなつて、彫刻界に獨歩の名を擅にしたのも決して無理ならぬことである。しかし狩野派が元信以後畫界に覇をなしたのと同じく、左家も甚五郎以後二世三世に及で恐くは彫刻界に勢力を占めたのではなからうか。けれども次第に振はずなつて、唯に一凡工となり畢つたことかと思はれる。伏見に住んだと云ふ傳說を見ても文祿頃から江戸の初へかけての人であつたらしく、其子孫の京都住居も亦首肯される。それで高松藩に抱へとなつたのは其後裔であらうと推測するも强ち無理ではあるまい。要するに左甚五郎の事蹟は甚しく曖昧で、之を取調べることは頗る困難である。名に於ての甚五郎であつて、實の甚五郎

は遂に之を捕捉するに由ない。彼は猶龍の如きものか。けれども其名聲に依りて判斷すると、確に又彫刻界に於ける龍であつたらうと思はれる。それで雲蒸龍變した彼は、遂に又雲中のものであつた。

第三十四　五郎太夫祥瑞

五郎太夫祥瑞の作と云はれる陶器は世間に往々傳はつてゐる。尤もいかさまものは隨分あるが、いかさまものでなくて、祥瑞の作として珍重されるものも間々見受ける、昨年末の京都麩半中村家の賣立品の中にも祥瑞作のものが數點も見えて、蜜柑の香合一つが二千八百三十圓と云ふほどの高値であつた。

然るに又或一部の黒人筋では、祥瑞の作なるものは絶無であると云つてゐる。割合に陶器の蒐集はやゝ見るに足りる、東京帝室博物館でも、祥瑞の眞作とも見るべきものは唯一點しかないとも云はれてゐる。

此人の傳記も朧氣ではあるが左甚五郎ほどではない。祥瑞は伊勢の松坂在大口湊の人であると稱せられる。日本の陶器に就いては陶器考だの、陶器考證だの、其他小篇冊子が色色あるが、完全に近い陶磁器史と云ふものは殆どないと云つてよい。此等の諸書中比較的詳細なのは日本陶器全書であらうが、其書中祥瑞に關する記事が二箇所ある。先づ之から取調べて見よう。

藤四郎、瀬戸窯を開いて後、三百年を經て、後柏原天皇の御宇に至り、伊勢松坂の人、祥瑞なるものあり、通稱を伊藤五郎太輔といふ、支那に遊び、明の磁器を製する法を傳へて歸朝し、肥前唐津の工人に之を敎へて磁器を作らしむ、之より磁器の製法漸く全國に洽し、祥瑞の傳說に就ては、諸說一ならず、或は曰ふ、伊勢五郎太輔、支那に行き、明代祥瑞に就き陶法を學べるにて、祥瑞は、五郎太輔にはあらず、其の作品の上よりいへば、五郎太輔の自作に係れるものは、必ず祥瑞之を造ると書し、無落款のものは、支那祥瑞の作品なり、兩者を混ずべからず、と其の何れを眞とすべきかは、據て信ずるに足るべき記錄なきを以て、之を正

すに苦むと雖、暫く前説を取て此に錄することゝせり。

祥瑞は伊勢松坂の人、通稱を五郎太輔といふ、支那に航して、瓷窯の製、瓷製の法を學びて歸朝し、肥前に至りて窯を各所に築き、土を各所に發見して青華磁器を創製したり、この祥瑞傳に就きては異説あり、祥瑞は支那明代の人五郎太輔はその祥瑞に就て磁製の法を學べるにて、兩者全く別人なりとの説あるとは前に述べたり、然れども五郎太輔の祥瑞なることは、明の正德八年（我が永正十年）五郎太輔業を卒へて歸るとき、明の李春亭送別の詩あり、其書伊勢山田の神宮寺に現存せるものに徵するも、隣交徵書の同書に載錄しあるに見るも、其の然るを知らるゝなり、

送居士五郎太輔歸日本　李春亭

敬將玉帛覲天顏　同春扶桑杳渺間
船泊古鄞三佛地　抔傳新春四明山
梅薰細雨江頭別　帆引清風海上還
明到賢王應有問　八方職貢溢朝斑

惟ふに祥瑞の肥前に青華磁器を傳へたる、或ひは唐津に於てし、或ひは有田に於てし、或ひは其他に於てしたりしと雖も、有田皿山の地、最も染付に適せしを以て、最も多くこゝに燒物を作りしならんか、而して此の地にて燒きしものは、白藥藍繪の貫乳あり、吳須に似て土和らかなりしを以て、故らに銘を付せず、年所を經る間に、古びて質惡し

くなることを憂ひしものならん、そは兎に角、青華磁器は斯の人によりて、有田に本邦磁器の發端を立しものなり。

五郎太夫が伊勢松坂在の人なるは殆ど疑ふべからず、又其姓の伊藤と云へるも畧信ずべきやうである。五郎太夫と祥瑞とが別人であると云ふは甚だしい附會の説で、吳祥瑞は五郎太夫自らが支那流の佳名を附したものと思はれる。しかし之に就ては古來異説が多い。祥瑞は五郎太夫が同伴し來つた支那人であると云ふ説もあるし、又祥瑞は明の名工で、五郎太夫は其名を慕て以て號としたのだと云ふ説もある。けれども善く調べて見ると、果して支那人に吳祥瑞と云ふ名工がゐたと云ふ證據もなければ、又支那人が五郎太夫と同伴來朝したと

云ふ證據もない。云はゞ吳祥瑞と云へる支那人流の名に衒惑して、一圖に支那人であらうと臆測したに過ぎぬ。確然たる證據のない以上は之を信ずることは到底出來難い。李春亭の送別詩に依りて五郎太夫が永正十年に歸朝したことが明白である、此人の年代も之に依りて確められる。けれども歸朝して後、肥前に窯を築き、土を各所に發見して青華磁器を作つたと云ふ傳説は果して信ずべきであるか。有田燒は果して此人に依りて開かれたものであるか。慶長三年鍋島直茂が朝鮮征伐より歸りたる際に朝鮮人李參平なるものを伴ひ歸り、朝鮮の磁法を以て磁器を作りたる以前に、此の地に磁器があつたかどうか。若しあつたとすれば、磁器の製法が慶長頃まで

傳はつて居らねばならぬ。然るに事實は慶長以前に九州には磁器を燒いたことがないらしいとすると、五郎太夫が窯を有田に開いたと云ふは頗る疑はざるを得ない。

祥瑞が支那人であるなどの說も此邊から胚胎してゐる點もなきにあらずである。どうも五郎太夫が九州で燒いたと云ふ證跡はない。そこで九州ばかりではない、日本で燒いことがないなどと唱へる一派もある。朝鮮征伐は我が窯業史に一紀元を劃したものであつて、其以前九州邊の窯業は甚だ幼稚であつた。世に傳はるやうな五郎太夫の作品の如き優秀なものは殆ど見當らないと云つて差支ない。

鎌倉時代に藤四郎が宋に入つて製陶の法を傳へ、歸つて瀨

戸窯を開いたのは、我が窯業史上に特筆大書すべきことであるが、陶磁器製造の盛になつたのは、實に豐太閤の朝鮮征伐に負ふ所が多い。筑前の高取燒は黑田長政が征韓の歸るさに、朝鮮韋登の陶工二人を連れて歸つたのに創まる。此二人は我國に歸化して、名を六藏、八藏と改めた。此八藏は加藤清正が伴ひ來た歸化の朝鮮人新九郎の婿であつたから、長政は新九郎を肥前から招いて、六藏、八藏等とゝもに製陶に從事させた。之が即ち小高取である。豐前の上野燒は、細川忠興が朝鮮人尊楷を招いで窯を築かせたから起つたのである。此尊楷は歸化して姓名を上野喜藏と改めた。肥前の有田燒は慶長三年、鍋島直茂が朝鮮より凱旋の歸途、朝鮮人李參平なるも

のが、直茂の臣多久長門守政順に從ひて歸化し、多久村に磁器製造を始めたのに基する。しかし此多久村の土は磁器に適さなかつたため、所々に轉々し、最も後に泉山で白堊を得て之より精巧なる磁器を作り得たと云ひ傳へられる。鍋島家の取調書には詳に之を記錄してゐる。

一、抑も松浦郡大河内有田の陶器創業は、直茂公朝鮮御歸陣のとき、日本の寶に可レ被レ成と燒物師上手頭立ち候者、六七人被二召連一、佐賀郡金立山の麓に召置かれ燒物仕候。慶長の末、伊萬里の内、藤の河内へ相移さる、それより日本人見習ひ、伊萬里有田方になり候由、元和の初なり。

一、寛永十四年三月、多久美作守ハ被二仰付一御領中の燒物師

御立山を切荒すに依りて、唐人筋の外は男女八百餘人（内男五百三十八人、女二百九十四人）被二相拂一。

右高麗人子孫多くなり、燒物しけるを、日本のものも見習ひ、細工に仕付、伊萬里有田方々へ散處し、皿屋薪の爲めに山を切荒しけるより、伊萬里郷皿屋四箇所、有田郷同七箇所の者共、前條の人數營業差止められしなり、尤も日本人の中にても仔細あるものは、美作守切手にて被二差置一候なり、正保四年の頃には、總燒物師窯數百五十五、窯車數百五十五車なりし、又其頃伊萬里有田所々にて燒きしを、今の有田白川山、其外十三箇山に御打寄せ相成りしなり、抑も藤の河内より轉じて有田郷に移りしは、元和の頃泉山

の磁石を發見せしに起ると云ふ。

一、國主の御用燒將軍家へ獻上品等は、松浦郡大河内山にて製造し、職人も御扶持頂戴、悉皆官費にて調へしなり、勝茂公御代より手明鍵副田孫三郎家筋、出納その外監督に被仰付、彼の地在住代々當職を相勤めしが、凡そ寛保の頃より有田代官所より監督も兼勤となり、副田氏は佐賀に歸住せしと云ふ。

前書の通り、大河内有田の陶器營業は高麗人彼地に被相移候が創始なり、祥瑞のこと、藩史は勿論、該地の口碑等にも絶えてなきことなり。

一、今の伊萬里津も昔時は松浦黨伊萬里氏の居所にて一僻

地なり、伊萬里郷有田郷の燒物隆盛なるに從ひ、當地より所々へ運送の船便有之に付、元和の頃より町を立てしなり幸善町等の名は高麗人の名を取りしとぞ、殊に有田の山中は伊萬里より南に方り三里を隔つ、昔時は他國人の行くべき境地に無之、素より祥瑞が時代までは磁石發見も無之、斯る僻在不便の地へ祥瑞が來るべき譯更にあるべしとも思はれず、總じて有田郷は松浦黨有田氏の知行所にて、有田氏の居所も有田にはなし、同所より三里北山谷村邊にありしと云ふ、慶長以前有田の僻境たること言を待たざるなり。之に依れば五郎太夫吳瑞祥と有田窯と何等の關係なきが知られる。肥前の三河内窯は慶長年間中朝鮮の陶工巨關が平戸窯

を築きたるに始まり、其孫今村如猿が東彼杵郡折尾瀬村三河内に窯を移したからこの稱がある。肥後の八代燒は慶長三年、加藤清正が朝鮮より凱旋の際釜山浦の尊楷を召連れて來たのに始まる。大隅の帖佐燒は島津義弘が朝鮮より伴ひたる陶工中殊に優れたものを、姶良郡帖佐に置いたから起る。薩摩燒は島津氏が朝鮮の陶工十七人を召連れ歸り、之れを鹿兒島の高麗町に居らしめ、此に窯を築きたるを起源とする。其十七人は卽ち伸氏、李氏、朴氏、卞氏、姜氏、陳氏、鄭氏、東氏、林氏、白氏、朱氏、崔氏、沈氏、膚氏、金氏、何氏、丁氏である。斯くの如くにして、朝鮮征伐の結果は我が窯業の盛大を來したのである。

九州の諸窯は旺然として盛になつたが、五郎太夫は更に之と關係がないやうである。然らば五郎太夫は內地に於て製陶に從事しなかつたと云ふと、さうでもないらしい。內地に於て燒いたに相違はないが、その遺蹟は殆ど分明でない。畿內地方であらうなどゝも云はれてゐるが、更に確證はない。又支那の原料を用ひたとも云はれるが、之は或はさうであつたかとも思はれる。とにかく五郎太夫吳祥瑞は、歸朝後いづれかの所に窯を築いて磁器を作つたことは疑ふべからずと信ずる。それで、今日も其遺品の名作を傳へる。けれども決して有田窯の祖先ではない。其弟子には五郎七五郎八の名工さへあつて我窯業發展上に多大の貢獻をしてゐる。

第三十五　由比正雪

元和偃武以後、江戸幕府の基礎が次第に堅くならうとしつつあつた際に、浪人の分際を以て之を動搖せしめんとした正雪は、よし其事は物の見事に失敗に畢つたとは云へ、乾坤一擲の壯擧を試みんとした其意氣はまた快男子たるを失はぬ。

當時實見した人の記錄によると、正雪は身の長低く、色白く、肉づきは尋常であつたが、面色に非凡な所があつて、額短く、脣厚く、眼光烱々として人を射、言葉は如何にも落着き拂つて、態度は悠々たるものであつたと云ふことである。

豐太閤は體格大ならず、面色黑く、不男であつたが、眼は如

何にも鋭く、仰ぎ見ることが出來なかつたと、來朝した朝鮮人の實見錄に載つてゐる。正雪も亦其亞流であつたと見える。

熊澤蕃山が正雪を一目見て、池田新太郎少將光政にあの男は後日禍を起さすものでござらうから向後お近づけなさるなと申上げ、正雪は又蕃山を目して、彼の狀貌を見るに、他日必らず禍害を釀すべきものならん、用ゐ給ふなと云つたと云ふ有名な傳說がある。之を事實とすると、正雪が一癖ある面魂の男であつたことは歷然である。

正雪は駿州有度郡足洗村の生れで、其父は農業の傍に紺屋を業としたものである。正雪は其次男で、兄弟は彼の他に三人あつて、初めは駿府の臨濟寺の小僧となつたが、其後、武

家奉公を思ひ立つて、江戸表へ出た。一體に器量人であつたが、未ださしたる主人を見つけ得なかつたうちに、或時其の寓居の近所に失火があつた。火の手は次第に擴がつて、正雪の住居も危くなつたから、それを避けようと遁げ出た途中で掛硯箱を拾つた。之を開いて見ると、中に軍學の書があつた。はて不思議なものが手に入つたと、之を熟讀して、之から楠流の軍學を講じたと云ふことである。神田田町に住で居た時は、手跡と謠曲との指南をして、傍ら軍學を講じたが、軍學の方が盛に行はれて、本職の方はお留守になつた。そこで天晴れの軍學者となり濟ましたのである。

思ふに正雪が非望を企てた動機は、此軍學研究がなせる仕

業であつたことと思はれる。軍學の理論を實行して見ようと云ふ夢幻的野心が遠因であると信ずる。ところで軍學指南がまんまと當つて、弟子は次第に殖える。其弟子も一山百文の連中ではなくて、旗下の歴々から大名までが續々之を其家に請じて、軍學の講義を謹聽すると云ふ繁昌さで、正雪の山は旨く掘り當てたのである。

すると其門には四方の浪人がやつて來て、正雪に仕官の道を賴む、顏の廣い正雪のことであるから其ために口を聞いてやる、正雪の紹介であるから大名方も之を抱へてやると云ふ有樣で、正雪の家は一種の登龍門であつた。浪人の寄食するものも少からず、談笑の間には天下の政治の得失も議論した

であらう。例の夢幻的野心は此浪人どもに、煽てられたりなどして大分芽を生やしたらしい。

丸橋忠彌も亦其弟子の一人で、又浪人の一人であつた。忠彌は十文字槍の名人で、正雪の推薦を以つて大名旗下の邸に出入し、其家臣などに槍術の稽古をしてやつた。

ところが此に正雪、忠彌の徒をして夢幻的動作を敢行せしむる大原因が出來した。それは三代將軍の薨去四代將軍の嗣立といふ一事變が起つたのである。創業時代を去ること遠からぬ世とて、大樹が倒れて、若木の跡目相續には少からぬ動搖を來すのであつた。當時は宿老も少からず、又少壯智略の士もあつたから、互に戒飭して、進取よりは、寧ろ保守の政策

を取り、積極的よりは、寧ろ消極的政策を執つて、内を固めることを大事と心がけた。其結果は自然大名どもゝ遠慮勝となりて、幕府の嫌疑を避けるやうにくとつとめる。浪人どもを召抱へることなども追々なくなつて來て、浪人どもは出世の道が開けず、生活にも窮する有樣となつた。浪人の親方である正雪が此時勢に平かならざるは當然のことで、又浪人どもが正雪を擔ぎ上げようとつとめるのも、亦自然の勢である。正雪の叛旗は此近因に依つて揚げられたのである。望遠雜錄に、「此年ほど浪人多く集りて、諸家の助力仕官を望み、乞食非人の徒黨は巷に滿ちて、食を求むる事群る蟻の如し、由比正雪此樣を見て獨り咲して、至情の逆意内に含みて、年

月志した大望の氣始めて外にあらはしけり」とある。此書は俗書で、甚だ信用し難いが、正雪が此時勢を機としたといふことは勿論であるが、時勢に挑發されたといふことも疑ふべからざることである。つまり年來夢想した夢幻的野心が此の近因に依りて、事實となりて現はれたものと見て差支がない。

紀州大納言頼宣公は、南龍公と謚せられた剛勇の人で、將軍家康の第十番目の子である。御三家の一人として、紀州及伊勢松坂を合せ五十五萬五千石を食んで、幕府に取て最も重要なる地位に居たのであるが、性來勇邁の氣象として、時々禍を釀して幕府の嫌疑を受けたのである。南龍公言行錄にも、「近國他國に名あるもの、地侍其外にも、内々にて御合力下さ

れ、何事にてもある時は、御用に立たむと申す輩數十人あり、美濃國小栗野には、後藤又兵衛年房が組、山田外記入道して永哲といふ、是にも御内證にて、御合力下さる、覺ある兵故なり、伊達源左衛門次男角左衛門義も、病者と聞し召され、仰にて泉州中村に田地を御求め下され、成田庄次郎婿になされ、卜玄と名を替へさせ、御差置きなされ候、鐵砲二十挺並に足輕具足、羽織、指物まで下し置かれける、何事ぞある時は御用のためなり、勢州、和州、河内、江州、山城、丹波、攝津に斯樣の輩其數を知らず、若し事起る時は、江戸の御手遣以前に公儀へ一廉の御奉行なさるべしとの御心懸にて如此といへり」とある如く、扶持する浪人も少からずあつた。斯う云

ふ、大諸侯であるから、慧眼なる正雪は其名を利用して、紀州様の仰と稱し、其判形を僞造して、謀書を認めたのであつた。

之は此事件が終つた後であるが、紀州侯直判の書面數通を浪人どもから幕府へ差出した。驚いたのは幕府の有司、すはこそ一大事出來したれと、晝夜密談あつて、とにかく紀州侯の登城を促した。井伊掃部頭直孝、酒井讃岐守忠勝、松平伊豆守信綱等列席して、諸浪人謀叛の次第を披露すれば、阿部豐後守忠秋進み出で、紀州侯の書狀數通を差出す。紀州侯其書狀を取つて披見し、打解けたる顏色にて、「さても〳〵目出たいことぢや、最早氣遣はこれない、其仔細は、彼の徒ども、

外様の大名の判を似せ、謀書を致したならば、さてこそ三代の御恩を忘れた氣違ひものめが、逆心を企てたとの御疑もあらうなれど、我等の判を似せ、逆心とたばかつた上は、上の御氣遣は少しも御座らぬ、但し御幼少の公方様、我等をお疑とあらば、我等唯今國を差し上げ、思召次第に相成るでござらう、さあらば少しも御心配はこれあらず、さても〳〵天下太平の基、まことに以て大慶至極のことで御座る」と挨拶があつたから、列座の面々皆々あつとばかりに感心して、事故なく落着したといふことだ。流石は豪傑肌の、しかも頓智の才ある紀州侯のことであつたから、辯解も巧みで些の疑を挾ませなかつたのである。けれども、紀州侯に此難題が到來す

ることは、既に登城以前に承知せられてゐたと云ふことは、南龍公言行錄に「賴宣君は、百姓、町人、出家、山伏にも、内々御懇意をなしおかれ、其輩國々にありしかば、珍らしき事を必らず早く御聞あり、正雪隱謀の儀御判を謀書いたし候事も駿河狐ケ崎邊の眞言坊主に御懇意のものあり、七日前に吉見喜左衞門方へ登り、渡邊若狹守直綱に注進仕りける故、前方に御聞なされける」と見えてゐるから、豫め登城以前に申開きの腹案は出來てゐたことゝ思はれる。

紀伊大納言の名を借りたのが、人數を集める手段であつたと云ふことは、正雪自分の書置に認めてある。又此書置に依ると、正雪も幕府を顚覆させるなどは到底思ひも寄らぬと覺

悟してゐる。そんならば何が目的かと云ふと、當時の執政を處罰して見たい位が關の山であつたのである。

望遠雜錄などには、皇室の衰微を嘆じ、楠公が最後の遺言などを一味徒黨のものに語り、尊王の爲に義旗を揚げたが樣に書いてあるが、書置には微塵もそんな抱負は書いてない。勿論勤王の義旗などゝ云つたのは、後人の作りごとで、正雪の謀叛は前に云つたやうな次第である。正雪の書置と云ふものは左のやうなものである。今便宜の爲めに之を書き下しに改める。

今度讒奸これあり、私、叛逆を致すやうに聞召入れられ、是非なき仕合、尤も斯くあるべき儀と存候、併私體、如何

んぞ四代の天下を亂破せしむること叶ふべき儀にこれなく候、然れども天下の制法無道にして、上下困窮仕ること心あるもの誰か之を悲まざらんや、然るに松平能登守諫をなし、遁世すと雖も、還つて狂人と執なし、忠義の志空しく罷成り候こと、是れ天下の大なる歎、上様御爲宜しからざる儀に存候、私不肖に御座候得共、天下困窮せしむるところの讃岐守遠流せしめんため、少々僞り謀りて、人數を催し、暫く籠城せしめ、此旨段々天下御長久の政擧げ申し、其上にて如何やうにも罷成候得共、不肖の志徒に罷成候、紀伊大納言樣の御名を借り申さず候得ば、人數のかたらひ成り難く候故、僞りて御扶持を蒙り候者と申候、私儀誰人よりも扶持申請候ものにこれなく候、心底天の照覽此外他なく候、申達すこと數多御座候へども、時急ぎ早々申殘し候、以上。

御奉行所

由比正雪

此ことは、猶一味同類の金井半兵衞の書置に就て見ても明瞭である。其書置の一節に、

正雪、無道利欲にして此事を企つるにあらず、先君御他界後、政邪にて、武家、出家、農商まで或は患ひ、或は怒り、是故、上に訴へんが爲、僅の浪人を催し、一所を堅めんと欲す、縱ひ自滅すと雖も、天下善政のため、一箇の身命を

惜むべけんや、故に無道に非ざること。

とある。

正雪の事變が露顯したのは、慶安四年七月二十三日老中松平伊豆守信綱の家臣奥村權之亟が其主人に密告したのに依るので、弓師藤四郎が町奉行石谷左近將監貞清の屋敷に訴へたのも此日である。丸橋忠彌が捕縛に就いたのは翌日の朝丑滿頃で、正雪が駿府の茶屋町旅店梅屋九郎右衞門の方で自殺したのは翌二十五日のことである。

第三十六　織田信長

予は古今の英雄中、最も信長を好む。

秀吉は、體軀矮小にして、面色黧黑であつたと云ひ、家康は、田舍びた老爺であつたと云ふが、信長は、色白な大兵肥滿な偉丈夫であつた。「國色無雙の評ある小谷の方を妹に持ち傾國の佳人淀君を姪に持つた信長の事であるから、天晴の好男子であつたらう。」

信長が無かつたならば、秀吉も、あれだけの幸運を得る事は困難であつたらうし、家康も、天下を統一し得ることは、難かつたであらうと思はれる。信長は、これらの英雄の爲めに、其進路を開いた人で、又これらの英雄の敎育者であつた。つまり、信長は、これらの英雄を作り上げた偉勳者である。

尾濃の平野は、其觀甚だ平凡で、稜々たる高山的英雄を作

ることは出來ぬが、偉大なる英雄を作り出した。何時の頃から云ひ出したのか、名古屋者は薄情であると云ふ香ばしくない世評を受けてゐるが、これは、果して事實であらうか。名古屋は中京と自ら誇るが如く、徳川時代には、御三家の一であり、提封七十餘萬石、東海道の中樞に居り、土地は肥え、物産に豐かに、經濟に於ても、綽々として餘裕あり、從つて遊藝娯樂も盛んで、文化も他に比して進み居たから、其人民も一般に社交的で、おしなべて才子肌となつたものではあるまいか。從つて、斯の如き惡評を蒙る所因を作つたのではあるまいか。名古屋出身の二大臣が、其同僚に殉し、男ちしい態度に出でたのを見ても、名古屋人必ずしも薄情ならず。

秀吉は此平野が作り出した最も大なる者（固より日本に於ても最大なるものなれ共）である。然し此最大なるものを仕立上げた信長に至りても亦同じく最大たるを失はぬ。信長は彼自が英雄であつたのみならず、英雄を作り出すに於て大なる技倆があつた。信長は、戰に於ける懸引陣法に於いて、これら英雄の師範たりしのみでは無く、英雄をして、自ら工夫し、研究し、修養せしむる開發的教育を施したものである。信長は、部下の褊將を作るの人では無くして、獨立自營の英雄を作るに於て長じてゐた。必ずしも信長が、天下布武の業を起したるが故に、部下の褊將が、獨立自營の英雄となつた譯では無い。信長は、精忠無二な譜代を作らずに、寧ろ謀反氣のある豪傑を作つた。武田

信玄は、英雄であつたが、甲州流の戰術に明るい甲州武士馬場美濃守、山縣三郎兵衞などを有してゐても、天下を窺ふ大望者を有さなかつた。家康の家來には、忠義一圖の三河武士が雲の如くあつたけれども、井伊、本多、酒井、榊原、鳥居なんどの忠君奉公の勇士は、獨立自營の豪傑では無かつた。此ために、武田氏の遺臣は、甲州武士として名高く、家康は三百年覇府の基を開いた。然し信長によつて教育せられたるものは、何れも一癖あつて、折あらば、天下を取つて見ようとの大望を抱く者が少なからずあつた。これ必ずしも時勢が然らしめたばかりでは無く、信長の待遇が其やうにしむけた結果でも無く、信長は、英雄を教育する人で、忠臣を作る人

では無かつた。

秀吉は此點に於ては、信長と酷似してゐる、蒲生氏郷と云ひ、石田三成と云ひ、何れも天下を窺ふ豪傑であつた、信長によりて教育せられた秀吉は、又英雄を教育したのである。秀吉は、信長の氣心を呑込んで立身出世の道を開いた。信長の英雄教育は、一隅を擧ぐれば、三隅を以て反へると云ふ開發的方法であつた。秀吉は能くこれを呑込んだのである。萬事に機轉が利き、諸事早速なるは、信長の最も好むところであつた。日常坐臥の間より、戰の懸引まで、總てこれを以て律したのである。桶狹間の戰も咄嗟の際に敵の機先を制して奇捷を博したのである。三好三人衆が、將軍義昭を攻めた時

に、信長は、大雪を冒して、岐阜から三日路のところを、二日にして六條御所に駈け附けた。これも例の迅雷疾風的行動を以て、敵の機先を制したのである。秀吉は、能く此呼吸を呑込んでゐた。又、其教育に訓練されて、萬事に早速であつた。山崎の合戰も、賤ケ嶽の戰役も、これに依つて大勝利を得たのである。

信長は、生得の我儘者であつた。天馬空を行くが如く、他の拘束羈絆を受くること無く、己れの思ふ儘に働いた人であつた。其少年時代に於て、大虚氣者として、他の嘲笑を受けた時から、本能寺の最期に至るまで、其我儘を押通して、一生、傍若無人の振舞を成し遂げた。彼は、一種の天才的英雄

であつて、殆んど捕捉すべからざる人物であつた。此我儘なるよりして、好んで人を驚かせて、自ら快なりとし、人を馬鹿にする事を何とも思はない。秀吉の如きは、能く此氣心を承知してゐた。森蘭丸の如き英雄の卵も、能くこれを了解してゐた。明智光秀の如き、信長とは、全然其性格を異にしたるものは、此性質を呑込み得なかつた。永い間の事であるから、知つてゐたらうが、これに堪へ忍ぶ事を得なかつた。然し光秀も、信長を弑して、三日天下でも取得たのは、幾分か信長の英雄教育の感化を受けてゐたのかも知れぬ。

此天才的英雄も、唯生來の生地ばかりでは無い。勿論、父信秀の英雄的遺傳を受けてゐたのではあるが、彼は、彼自ら

に訓練し、刻苦して自ら作り上げたのである。或時、武田信玄が、尾張の國の僧天澤に、信長の行儀を有の儘殘らず物語れと云つた時に、「朝毎に馬に乘られ候。又鐵砲御稽古、師匠は橋本一巴にて候。市川大介を召し寄せ、弓御稽古、不斷は平田三位と申す者近づけおかせられ、これも兵法にて候、しげしげ御鷹野に成られ候。」と申した。其他に何か嗜好はあるかと尋ねたるに、「舞と小歌好きにて候。」と申す。幸若太夫は來るかと問へば、「清洲の町人に、友閑と申すもの、さいさい召し寄せ廻せられ候、敦盛を一番より外は御舞候はず候、人間五十年、けてんのうちをくらぶれば夢幻の如くなり、これを口付けて御舞ひ候ふ、又小歌を好きで歌はせられ候。」と申せば、異なものを好かれるものかなと、信玄は不審がり、如何やうの歌ぞと尋ねる。すると天澤は「死のふは一定、しのび草には、何をしよぞ、一定かたりおこすよの、これにて御座候。」と答へた。信長は斯の如く、騎馬弓鐵砲兵法を、充分に習練し、又、水練の術にも長じてゐた。殊に馬術は餘程熟心にこれを修め、殆んど他人の企て及べからざる點にまで到着した。彼の天才的英雄の素質は、此習練に因つて、益々發揮したのである。

信長が、幸若の舞に於て敦盛をのみ絶賞し、人間五十年の人生夢幻觀を愛し、死のふは一定の小歌を愛吟したのを見ても、如何に彼が人生を果なきものと觀じかがわかる。但し信

長の此人生觀は、此の世を厭離すのでは無くて、どうせ死ぬる命の、其短かき五十年に思ふ儘なる事をやつて退けようとの觀念からであつた。桶狹間の役にも、其出陣の時に、人間五十年の舞をなし、舞ひ終つて、物具附け、立ちながら食事をして、戰場へと向つた。彼には、此決死の覺悟がある。行くところとして打勝たぬ事は無い。人間五十年に一つ足らぬ四十九歳に於て、彼の夢は覺めた。「是非に及ばぬ」と、本能寺に於ての最後の言葉は、其夢幻の終りであつた、死のふは一定を成し遂げたのである。其大業は半途にして破れたとは云へ、彼が思ふ儘なる行動を成して、夢幻の一生を過したのであるから、些の遺憾は無かつたのであらう。

時代の影響と、秀吉の豪壯とを以て、桃山時代は、豪華なる時代であつたが、短いながらも、其以前に安土時代のあつた事を忘れてはならぬ。安土城の規模は、甚だ宏大なるものであつた。石藏の高さは、十二間餘、其内を一重土藏として用ゐ、これより數へて、七重の櫓を造る。第二層は南北二十間、東西十七間、高さ十六間、柱の數は二百四本、各座敷の襖の繪は、當時の畫家狩野永德これを畫き、或は遠寺晩鐘の景色、或は鵝鳥の繪、或は燒野の雉子を愛するところ、或は唐土の學者の像を畫く、金碧燦爛として、結構謂はん方も無い。三層四層五層六層も、皆これに合ひ、花鳥の繪、仙人の繪、龍虎の圖、桐に鳳凰の圖、釋尊說法の圖等を畫く。第七

層は、三間四方座敷の内外を、悉く金を以て塗り、内外の柱は黒漆にて塗る、四方の内柱には、昇龍降龍を畫き、天井には、天人影向の圖、座敷の内は、三皇五帝、孔門十哲、商山四皓、七賢人等を畫いた。信長記に、此城の結構を敍して、

「抑當城者、深山こうこうとして、麗舍歴々甍を並べ、瓊軒光輝く御結構之次第、不申足、西より北者湖水漫々として舟之出入みちみちて、遠浦歸帆漁村夕照、浦々のいさり火、湖之中に竹生島とて名高き島有り。又、竹島とて峨々と聳へたる巖あり。奥之島山、長命寺觀音、曉夕之鐘の聲、音信れて耳に觸れ、海より向者、高山比良の〻嶽、比叡之大嵩、如意がたけ、南は里々田畠平々、富士と喩へん三上山、東者觀音寺

山、麓者海道往還、引續畫夜絶えずと云ふ事なし。御山之南、入江渺々として御山下門を並べ、籟之聲生便敷、四方の景氣盡其員、御殿唐樣を學ぶ、將軍之館研玉石、瑠璃を延べ、百官快く盡貴美被移花洛を、御威光御手柄不可勝計」と、云つてあるが如く、甚だ壯麗なものであつた。秀吉が派手好きであつた樣に、信長も亦派手好であつた。天正六年九月晦日、泉州堺に赴いた時は、九鬼右馬之允大船を飾り立て、旗指物を飜へし、幕打ちめぐらし、浦々の武者船も、兵具を以て船を飾り、信長の御座船には、夥しく唐物を飾り、われ劣らじと進上物を持參する。堺の僧俗男女は、信長を拜まんとて、皆皆綺羅を盡し、衣香四方に薫じた。又、天正九年二月二十八

日五畿内及び近國の大名小名家人を召し集め、主上の御前にて、馬揃ひをした。内裏の東に、北より南に掛けて、八町程の間に馬場を造り、其間に御上覽所を設け、左右に座敷を置き、結構の美を盡した。集まれるは、何れも名うての駿馬、乘つたる人々は、何れも當代の勇士であつた。其出立は、眞に目を驚かすばかりであつた。信長の服裝の如きは、最もきらびやかにて京都奈良堺にて選びたる唐織物の裝束を着け、頭巾の後の方には花を立て、蜀紅錦の小袖、紅純子に唐草の肩衣、同じ袴、腰には禁裏より賜はりたる牡丹の造花を挿し、白熊の腰蓑、猩々緋の沓を履いた。秀吉が醍醐の花見、北野の大茶の湯に先だつて、信長は、斯の如き豪華を盡して一世

の目を驚かしたのである。總見寺の建築も、亦此豪華の反映であつた。天正十年の元旦、近國の大名小名、安土に登城したるに、信長は總見寺の見物を命じ、大名小名總て禮錢百文づつを自身に持せ、總見寺に參詣して、御幸の間の拜見を命じた。其拜見の有樣は、「御座敷惣金、間毎に狩野永德被仰付色々樣々あらゆる所之寫繪筆に盡させられ、其上四方之景、山海田園鄕里言語道斷面白地景申に計なし、從是御廊下續きに參り、御幸之御間拜見仕候へとの御諚にて、かけまくも忝き一天萬乘之主の御座御殿被召上、及拜覽難有誠生前之思出也、御廊下より御幸之御間元來檜皮葺金物日に光り、殿中悉く惣金也、何れも四方御張付地を金に置上也、金具所者悉

以黄金被仰付、斜粉をつかせ、唐草を地ほりに、天井は組入、上もかゞやき、下も輝き、心も詞も及ばれず、御疊備後面上面上に青目也。高麗縁雲絹縁、正面より二間之奥に、皇居の間と覺しくて、御簾之内に、一段高く金を以て瑩玄光輝き、衣香撥當八方薫じ、御結構之所有り、東へ續いて御座敷幾間も在之、爰には、御張付惣金の上に色繪に樣々かゝせられ、御幸の御間拜見之後、初めて參候御白洲へ罷下候處に、御臺所之口へ、祇候候へと上意にて、御厩口に立せられ、十疋宛之御禮錢、忝くも信長直に御手にとらせられ、御後へ投げさせられ、他國衆金銀唐物樣々の珍奇を盡し、被備上覽生便敷樣體不申足」との參拜記事にてわかる。

前の馬揃にて御幸を仰ぎ、總見寺に玉座を設けたるを見ても、信長は尊王心に富んでゐた事が知られる。これは、父信秀の感化であらう。信秀は、天文十二年其臣平手中務丞政秀を京都に遣はして、禁裏の築地修理料四千貫を獻上した。時の帝後奈良天皇は、これを嘉したまひ、翌年連歌師宗牧の東國に赴くに事づけて、叡旨を傳へ、女房奉書と共に、古今集を賜つた。信秀は又伊勢の外宮を造營するの資金を獻上し、敬神の念にも甚だ篤かつたのである。信長が美濃の齋藤氏を亡ぼした時、永祿十年十一月、正親町天皇は、勸修寺晴豐に命じ、立入賴隆を下して、近畿平定を命ずるの勅を賜はつた。信長は深くこれに感激した。信長の攝津河内を平定して京都

に行つた時、先づ錢萬疋を獻上して供御となし、又諸國に沙汰し、御料を兼併したるものを戒めて、これを朝廷に返納させた。其後信長は、朝廷の供御を增し、宮中の諸節會等の廢したるものを復興した。又、金を京都の町民に貸して、年々其利子を納めしめて、供御の料に當てた。秀吉が尊王の念慮の厚かつたのも、亦信長の感化である。

此感化は其後永く傳はつて、德川氏の時に至りても陰には、皇室を抑へながら、陽には之を尊ぶと云ふ風であつた。

信長は殘忍酷薄の人と稱せられてゐる。比叡山を燒いて、延曆寺の僧徒を鏖にした事も、荒木攝津守村重の一族を殺したことも、武田勝賴の首を見て、德川家康は、これに禮した

るに反して、信長は、これを罵りたりと云ふことも、明智光秀を罵倒して、これを打擲せしめたといふ事も、皆信長の殘忍の例として引用される。傍若無人の我儘なる信長の事なれば、己れの氣に入らざることには、隨分思ひ切つた行動をした事と思はれる。然し殘忍酷薄は、殺伐なる戰國時代の事なれば、何れの豪傑も、これを敢てしたのである。天空海濶の量ある秀吉でも、現在の姪なる秀次に對しては、隨分酷薄であつた。謀叛の形跡が充分ならざるにも關はらず、これを高野山に送りて自殺せしめたのみならず其妻妾三十餘人を殺した。秀吉が、因幡の鳥取城を攻めた時は、百姓どもも此城に逃げ籠りたれば、兵糧が缺乏して、草木の葉までも食ひ、特

別上等の食物は、稲の株であつた。後には、これも盡きて、餓鬼の如く痩せ衰へたる城中の男女は、柵の際に寄りて、助けを乞ひたるを、鐵砲にて打ち倒せば、まだ息も絶えざる負傷者を、皆々寄つてたかつて、刀にて切つて其肉を奪ひあつたと云ふ事である。徳川家康は、慈悲重厚を以て知られた人である。けれども、大阪の寡婦孤兒に對しては、甚だ冷酷を極めた。種々なる難題を持ち掛けて、戰爭を挑發し、遂に悲慘なる最後に至らしめた。必ずしも秀吉家康を例として、取るには及ばぬ。戰國時代の英雄豪傑は、皆此殘忍酷薄を平氣に行つたものである。切つたりはつたりすることを平生の所業と心得たる時代なれば、少しも怪しむに足らぬ。酒宴の席

では、飲まぬものまでが歌つたり踊つたり騒いだりすると同じやうに、其時代の精神は、一般に殺伐となり、血を見る事を何とも思はぬ。此點に關しては殆んど其の道德が麻痺してゐたのである。戰爭に臨んで、精神が興奮して、人を切る事宛ら草を刈るが如きと同樣である。

されば殘忍酷薄を以て、信長のみを責めるは間違である。信長は元來情の人であつた。彼が詩的英雄なるも、其一半は、此情のあつた爲めである。近江と美濃との堺に、山中といふ宿があつた。此宿に、猿と綽名された乞食が住んでゐた。生れつきの片輪であつて、路人に憐みを乞うて、纔に名ばかりの生活を營んでゐた。信長は上洛歸國の途次、これを見て、

甚だしく不憫に感じ、處の者を召して此猿の事を尋ねたるに、其先祖が、常磐御前を殺したる其天罰により、代々片輪者を生むとのことであつた。信長は宿の長老を召して、物を賜ひ、これを以て永く此乞食を養育し、困窮せざるやうに取りはからへと命じた。情の無い人が、いかでかゝる事をしようぞ。

唯信長は、生來の我儘なる故に、思ひ切つた事を露骨に云ひ、露骨に行なふのである。荒木村重はこれを恐れて遂に謀叛した。其謀叛の噂が高い際にも、信長は其才を惜み、何とかして、是を用ひんとした。けれども信長の露骨の言行は、村重をして謀叛して、自己を全うせんと企たせたのである。陰險にして、譎詐百端の明智光秀は、信長の人となりを會得

せずして、遂に大逆を敢てしたのである。されば、信長を以て殘忍酷薄の權化の如く考ふるのは、間違ひと云はねばならぬ。信長は又吝嗇なりと云はれる。相撲を取らせて、其勝者に燒栗數個を與へたなどは、如何にもしみつたれのやうに見えるが、しみつたれの點に行くと、家康の方が遙かに立ち優つてゐる。信長は、其宿將功臣に隨分大なる土地を與へた。餘りに、土地を與へたが爲めに、足利氏は滅亡したのである。信長は固よりこれに鑑みるところがある。けれども、土地食祿を與ふるに吝なれば、人は働かない事は素よりである。信長は、確かにそれ相應に其の人の才能に依つて、或はその功蹟によつて、充分なることをしたのである。

延暦寺の僧徒が、淺井淺倉に味方したのを怒りて、一山を屠り、大阪の本能寺が、三好三人衆の味方をしたがために、これを攻めた。これらの點からして、信長は、坊主を憎んで袈裟にまで及んだ。此坊主嫌ひの信長は、却つて其反動として、切支丹宗を歡迎し、南蠻寺を建て、切支丹伴天連を好遇した。鎖國主義を取るなどと云ふ心は信長に毛頭無い。信長は、寧ろ開國主義であつた。信長の後を受けたる秀吉も亦開國論者であつた。家康も亦同じく開國主義を取つた。これら時代の代表者は、何れも進歩的で世界的であつたが、時代が靜穩となり、秩序階級が維持されるやうになると、退嬰的保守的となることを免がれぬ。切支丹の害毒を恐れて、これを

禁じたのは、秀吉も家康もこれを行つたけれども、其の開國政策に至りては決して變らない。徳川時代の鎖國は、羹に懲りて、膾を吹くの類であつた。この處に、進歩的と退歩的との差別がある。

信長は極めて大膽で豪勇であつた。大蛇が住で居ると噂さのあつたあまが池に、自ら躍り入つてこれを探險した。千草山の中を通過したる時、杉谷善住坊が、鐵砲にて覗ひ打つたが、信長は、素知らぬ顔してこれを探し求めもしなかつた。此豪勇なる氣象は、僅かに小姓二三十人を引き連れて、中國發向の爲めに上洛して本能寺に宿したのである。此の餘りに無勢なるは、遂に彼れが敢へなき最後を遂げる一つの原因と

なつた。

信長は、趣味の人であつた。けれども、元來武藝を以て家を成したのであるから、決して趣味に囚はれたのではない。三好家の料理は、信長の口には適さなかつた。信長は、依然として鹽のからい田舍料理に舌鼓を打つ人であつた。細川勝元は、淀川の鯉と、他所の鯉とを食べ分けたと云はれる。これも決してむづかしい藝當では無いけれども、兎に角、それだけ趣味が發達してゐたのである。信長の趣味は、それ程までに發達はしなかつたが、東山以來の時代趣味の感化を受けて、茶道にも志し、從つて、骨董趣味もありて、名器を愛藏し、これを蒐集することを努めた。此趣味は、秀吉に至りて、

遂に北野の大茶の湯を催す迄に進歩したのである。

信長は、秋霜の如く、號令嚴肅にして、國にありては盜賊無く、道に遺ちたるを拾はなかつたといふことである。又、京都に居れば、京都の市中は、整然として、絶えて不穩の事が無かつた。

其一生は、實に波瀾に富み、變化に富み、然も其末路は極めて悲壯であつた。得意の絶頂から直ちに蹴落されて、其の一生を終つた。古今の英雄中に在つて、信長の如き詩的生涯を持つた者は、殆んど一人も無いと云つても宜しい。又、信長程大なる英雄は比類稀である。

第三十七　雪舟

天才にも大と小とがある。天才の閃めきが折々あつて、雲間の片鱗だけで全體の現はれぬのもある。天晴れの天才を有しながら天傷したが爲に未成品に畢るのもある。天才の面影だけ存して、天才の實のないのもある。自ら天才と信じて、一向に天才でないのもある。天才はありながら磨かず修養せぬ爲に遂に其發揮を全うせぬのもある。不遇の天才もあれば、偶合の天才もある。天才を賴みにしたが爲に、之に累せられて、凡人として一生を過したのもある。天才があるとて、安心が出來ぬ。天才の發揮には色々の條件が具備せねばならぬ。

天才だなどと自惚れる奴にろくなものはない。舜は天下を治めたのを一向自分の手柄でないと信じたと云ふことである。眞の天才は自分の天才を意識せずに、其天才を絶えず磨いて修養して之を渾然たるものになし畢せるものである。天才などとおだてられるのは用心せねばならぬ。おだてるものもおだてるものだが、おだてられるものもおだてられるものである。天才など丶自惚れるより、凡物だと自覺する方がよつぽどましである、大天才に初めから自惚れたものはない。

日本の藝術史を見ると、到る處に天才が轉がつてゐる。其才の大と小とはあるが孰れか天才に非ざるなけんやである。けれども其才の大にして、其才の美を擅にしたものは果して

幾人ありやと云ひたくなる。堂々たる天才を持ちながら若死して、惜しみても猶餘りありと思はせるものもある。折角の天才が半途から凡俗化したのもある。天才の未成品、小天才はうろ〳〵してゐるが、天才の大なる、エポック、メーカーに至りては甚だ乏しいと云はねばならぬ。

其乏しいうちから、畫界の大天才を選ぶと、先づ指を土佐光長、雪舟、尾形光琳、圓山應擧の四人に屈せねばなるまい。日本固有の繪畫とも云ふべき倭繪卽ち土佐派の畫家中には高階隆兼の如き、土佐隆信の如き、土佐隆能の如き幾多の名手はあつたが、最も大にして此派を代表すべきものは、どうしても、土佐光長でなくてはならぬ。本阿彌光悅、俵屋宗達に

依りて創められた土佐繪を土臺とした裝飾畫は尾形光琳に依つて大成せられたと云つていゝ。長崎畫人の寫生畫は到る處に波を揚げたが、寫生の妙諦を得て圓山四條を起したのは圓山應擧である。而して古土佐が衰へて、我が藝術界が萎靡振はざるに際して、新藝術の樹立を全うしたものは實に畫僧雪舟であつた。

鎌倉の頃から禪が我邦に輸入されたが、禪は同時に宋元の文明をも將來した。支那の思潮は六朝時代に道敎卽ち南方思潮が其勢力を加へ、殊に佛敎の流行ありて、其の彼我相似の點は此兩者を接近せしめたが、唐を過ぎて宋に入ると、性理學の研究が盛となり、南方思潮と佛敎とは結びついて、一代

の氣運は心的方面の開拓に向つた。元代も其後を承けて、宋明兩時代の過渡期であつた。されば其文明も此時代的色彩を帶びたのは當然である。繪畫の如きも其影響を受けて、直に形似以外卽ち精神を捕捉することをつとめた。禪と此文明とが將來されて、我が藝術界が頓に其面目を一新したのは、固より必然と云ねばならぬ。

古い倭繪が振はなかつた時、此新氣運に乘じて揮灑した新畫家は多く禪僧であつた。可翁、明兆、如拙、周文などは皆畫僧であつた。如拙の畫風は周文に傳はり、周文の畫格は雪舟に傳はつたのである。丹靑若木集に、畫師的傳言派と題して、左のやうな系圖を載せてゐる。

- 明兆
- 如拙
  - 周文
    - 宗滿
    - 宗玖
    - 兵部
    - 等源
    - 雪舟
    - 相泉
    - 佐野
    - 侍從

右宗派は予が弟織部重賴高野大塔の成就に依り彩畫の爲に登山す、時に正覺院玄雄所持の君臺觀の終にありて、寬永十有四年夏六月二日一心院の地藏院に於て書寫せしめ畢ぬ。竹居淸事の西遊集にも、跋如拙畫後と題して、

雲谷等楊は海東備府の人なり、其の韞むところの妙を畫に發す、而して越江の文公を以て師となす、文乃ち如拙を以て師となす、拙の雲谷に於けるや三世の祖なり、雲谷此墨本を視て曰く箕裘なり、青氈なりと、宜なるかな珍襲するは、瑞庵又重きを其尾に借る、二妙と謂ふべし、併せて雲谷の屋裏に歸す。

とある、其師傳の道筋は明かである。例へば如拙周文は岷山三峽の水のやうなものである。雪舟の如きは恰も江が西陵に至りて、平地を得、其流奔放肆大、南湘沅を會せ、北漢沔を合せて其勢益々張るやうなものである。我が新藝術の基は斯人を得て始めて固くなつた。稀世の天才者でなくつて、焉んぞ

斯くの如くなるを得やう。

雪舟は俗姓、小田氏、備中赤濱の人とある。本朝畫史には「今に至りて赤濱の田間に、雪舟產するところの地ありと云ふ」とあるが、確にこれぞと云ふ確かな屋敷跡はないらしい。本姓は藤原氏、名は等楊、雪舟は其號である。山縣孝孺（周南）の雪舟傳には、「其の名を命ずるや蓋し亦楊補之の逃禪を慕ふのみ」とあるが、果して如何であらう。雪舟の號に就ては龍岡の雪舟二字說があるから其の本づく所は疑ふべからずである。

浮屠氏諱は楊、畫を能くするを以て縉紳庶士の輩と游ぶ、亦好で昔賢の墨妙を集め、楚石老人書すところの雪舟の二

大字を得て以て之を寶とし、遂に自ら雪舟と號し、予をして說を作らしむ。

此他に備溪齋と云ふ別號があるが、備は備中の備で溪は奇勝を以て知られた豪溪からでも取つたのであらう。又雲谷の別號は、畫史には「歸朝後、周防山口の雲谷寺に居る、故に雲谷と稱し、或は雲谷軒と號す」と云ひ、山縣の雪舟傳にも「歸りて周州山口に居り、室を天花山下に築きて雲谷庵と號す」とあるが、追悼集の季英說には「歸朝後、紫陽の雲谷に道を取り云々」とある。紫陽は筑紫のことであるが、して見ると雲谷は一概に周防とは定め難しい。又米元山主と號したとも云ふは、米元山雲谷寺と稱したからだとの說がある。し

かし米元を以て山號としたには何か譯がありさうである。米元輝米元素父子を慕つて斯く稱したと云ふ說も强ち否定は出來まいと思はれる。

又漁樵齋の別號ありと云ふ說もあるが、之は古畫備考に辨じて「按漁樵齋の詩序、英瑛の書する所、其序に或作齋軸請齋名」とあれば、雪舟の請しにはあらで、ある人畫を雪舟にかゝしめ、英瑛に齋名を請しなるべし、さらば漁樵齋は雪舟の齋號にはあらぬなるべし」とあるが如く、間違である。其の題漁樵齋の全文全詩は次のやうなものである。

畫師雪舟遊方于大唐、々々國裏之風烟、潤色其筆、剩分天童第一座、歸日域、片楮寫山水、則某山某水、四百州與六十州、

山河無隔碍、光明處々通、或作齋軸、請齋名、以漁樵而題一詩云、

拾異釣奇開此圖　千山影落一江湖　畫詩肝肺吐雲水　眞樂漁樵何處無

永正任神春二月　日　相鎌府沙門英璵、九九歳、書于玉澗下、

畫史に依ると、雪舟が十二三歳であつた頃、其父之を携へて其國の井山寶福寺の弟子となした。然るに雪舟の畫技は其天稟であつて、寺に在りても經卷を事とせぬ、師僧之を怒つて一日雪舟を柱に縛つた、其夕暮、師僧は之を憐み堂上に到りて自ら其縛を解かんとするに、雪舟の膝下に鼠が居るに驚いて、之を逐はんとしたるに鼠は更に動かぬ、異なりとして

之を見るに、之は雪舟が自ら流した涙で、脚の拇指で堂の板に鼠を畫いたのであつた、流石の師僧も之にはほと〳〵感服して、之から後は再び畫くことを禁じなかつたとある。雪舟の此寺に存つたのは永享年間であるが、何歳頃まで居たのか、それは不明である。其後京都に入つて相國寺の洪德禪師の弟子となり、又鎌倉に赴いて建長寺の玉隱英璵に從つた。

雪舟が天稟の畫技は周文に師事して、著しく進境に向つた、周文は相國寺の都司であつた。嘗て江州の永源寺に居たが、寺は愛智川の上流にあるところから、周文自ら越溪と號した如拙に從つて畫を學び、出藍の譽がある。畫史に稱して「其の畫くところの道釋山水人物花鳥は馬夏顏の法を用ひ、墨畫

は牧玉の奥を極む」と云つてゐる。　村庵小藁には

周文都管は兵部墨溪其畫を師とし、其印を傳へ、其眞を寫して其賛を求む、此老平日、工は天下の妙を窮め、而して外其容貌を視れば、則ち儻くは能くするところなきが如く、藝は衆人の善を兼ぬ、而して內其意氣を察すれば、則ち苟くも讓るところあるが如し、或は丹青を把りて、釋梵諸天の變相を佛寺堂宇の上に描貌すれば、卽ち以て飛動を墻壁になし、花鳥山水の狀を王公貴人の第宅に揮洒すれば卽ち以て光輝を屏障になす、或は其れ木を刻み泥を揑ね、未來の懸祀を符するものには、天王寺太子像を作り、吾が禪門に功あるものには、片岡達磨像をつくり、衆工手を斂めて

赧服するものには、雲居寺に於て無量壽如來高さ四丈の木像を造る云々。

とあつて、周文は繪畫のみならず、彫刻にも手腕があつたのである。周文の畫くところで、今日傳はる遺品には少からぬ疑問があつて、同一の人の筆に成れるものではないやうな相違がある。けれども、其うちには非常な優秀なものがあつて恐くは之が周文の本領であらうと思はれる。杏塢良心の天開圖畫樓記には「仍ほ公の畫家の系を案ずるに、如拙翁の的孫にして、いはゆる德元文公の眞子なり」とあり、了庵桂悟の天開圖畫樓記にも「親しく能畫師文公の左卷を佩ぶ」とある。此文公と云ふのは、卽ち周文のことである。興彥龍の半陶集

にも

僧周文あり、曾に王吳を呑み、眼に韋郭を睨む、畫中の三昧手なり、雪舟之に從ひて畫を學び、寒氷青藍の作あり。

と記してあるが如く、雪舟が周文に負ふところ少からぬことは分明である。

其後、周防に在つて、大内氏の客となつてゐたことは、竹居清事の西遊集中、寄楊知客并叙（楊知客とは雪舟のこと。楊は等楊の楊、知客とは、禪寺に於て賓客に接する役で、雪舟が此役をつとめてゐたからである）の註に寛正六年也とあつて、「今洛下畫榜に登るものは數人に過ぎず、里譚巷論兒童走卒もみな西周に楊知客あるを知る」と記し、

京洛曾遊楊客卿、結茆此地要終生、喜君畫格出天下、兒童亦知雲谷名、

の一詩を載せてゐる。これで見ると、寛正六年頃に、雪舟は周防に留錫してゐたのである。そのうちに大内氏の勘合船に乘つて渡唐することゝなつた。雪舟の畫技は是に至つて更に一進境を開いたのである。

雪舟が入明の年代は普通に寛正六年とあるが、これは誤傳である。應仁元年を以て入明の年と定めねばならぬ。本朝畫史にも「寛正中、海舶に乘じて大明に入る」と云ひ、山縣周南の雪舟傳にも「寛正六年海船に託して明國に遊ぶ」とある。但し周南の傳には「或は曰く應仁元年」とあるが、此方が正

しい。それは明の大興隆住山純拙老人魯庵が雪舟に送つた詩がある。其詩の小序に「去歳より四明に遊ぶ」とあつて、大明成化戊子季夏と書いてある。成化戊子とは成化四年のことで我が應仁二年に當る。しして見ると去歳は應仁元年のことである。然るに了庵桂悟の天開圖畫樓記には「成化四年大明に入る」とあるが、それは純拙老人の小序に「玆京に朝するに因りて」とあるが如く明の都に入つた歳で、入明の時代は其前年なることは疑ふべからずである。在明の年間は周南の傳には、「居ること五年、文明元年に至りて始めて國に歸る」とあるが、了庵桂悟の記には「三霜を更へて本朝に歸る」とあり、釋萬里の屏風雪舟楊公所畫跋にも、「三十年前南船に駕し大明

國に控ふるもの三霜」とあつて二年在明説は信を措くべく思はれる。入明の年から數へると三年目は文明元年卽ち彼の成化五年に當る筈である。周南が文明元年歸朝説は正しいが、入明の年を寛正六年としたから五年になるので、應仁元年とすれば、歸朝の時代は合つて正に三年目に當る。歸朝の年に四明の徐璉字は希賢なるものが送別の詩に

家住蓬萊弱水灣　丰姿瀟洒出塵寰　久用詩賦超方外　賸有丹青落世間　鷲嶺千層飛錫去　鯨波萬里蹈杯還　懸知別後相思處　月在中天雲在山

とあつて、其後記に成化五年歳次己丑夏下瀚、四明徐璉希賢書とあり。文明元年の歸朝は之れでも明かである。

其の明に在るや、天童寺に上り　其禪斑の第一座に陞つた彼が畫に四明天童第一座と署するは之が爲めである。了庵桂悟の記には「名山大川遊殆ど四方に遍し」と見え、英瑛の題漁樵齋には「大唐國裏之風烟其筆を潤色す」とありて、支那の名山大水は彼に幾多の畫材を供給したものである。雪舟が支那にあつて北京禮部院の壁に畫いたと云ふことは、畫史にも周南の傳にもあるが、之は杏塢良心の天開圖畫樓記に錄したことが其根源であらう。此記に、

向きに大明國北京禮部院、中堂の壁に於て尙書姚公公に命じて之を畫かしめて曰く、凡そ今の外蕃重譯して入貢するもの殆ど三十餘國に到るも、未だ公の畫くところの如きを

見ず、況や又本部は科擧の事を司れば、中朝の名士斯堂に升らざるものなし、是時に及び諸生を召し壁上を指して必ず言はん、是れ乃ち日本の上人楊雪舟の墨妙なりと、外夷にして猶斯道の絕手あり二三子各汝の業を勤めて斯域に到らざるやと、方に大邦に於て賞嘆を加へらるゝこと此の若きなり。

とある。此記は文明八年、良心が雪舟の爲に書いたものであるから、實傳に相違ない。

それで雪舟は明に在つて誰に師事したかと云ふと、雪舟が其弟子如水宗淵に與へた破墨山水の上に添へた文章がある。云ふ、

相陽の宗淵藏主余に從ひて畫を學ぶこと年あり、筆に已に典刑あり意を藝に游び、勉勵尤も深し、今春歸るを告げ、謂つて謂く、願くは翁の一圖を獲て以て我が家の蒐裘青氈となさんと欲すと、數日來りて之を責む、余眼昏く心耄に、製する所以を知らずと雖ども、其志に感じ、輙ち禿筆を拈り、淡墨を洒いで之に與へて曰く、余曾て大明國に入り、北大江を涉り、齊魯の郊を經、洛に至りて、畫師を求む、然りと雖も、揮染清拔の者稀なり、玆に張有聲並に李在二人時名を得たり、相隨ひて設色の旨を傳へ、兼ねて破墨の法を取る、數年にして本邦に歸り、熟ら吾が祖如雪周文兩翁の楷模一に前輩の作を承けて敢て增損せざるを知る、支

倭の間を歷覽して、彌々兩翁心識の高妙を仰ぐものか、子の求に應じ、嘲を顧みずして焉を書す。

明應二卯季春中瀚日

四明天童第一座老境七十六翁雪舟書

明に在つて雪舟が師事したと云ふ張有聲のことは明かでないが、李在のことは、佩文齋書畫譜、無聲詩史、畫史彙傳、明畫錄等にある。之に依と李在字は以政、莆田の人、雲南に遷り、山水に精工であつた、細潤のものは郭熙を宗とし、豪放のものは夏珪馬遠を宗とし、多く古人を擧倣し、筆氣生動す、また人物を善くし、四方其尺縷を貴ぶ、宣宗の時、戴文進より以下一人のみ、夏禹開山治水圖ありて世に傳ふとある。

しかし雪舟も云つてゐる如く、支那に遊で愈々如拙周文の高きを知つたので、張李からは設色破墨の法だけを傳承したのである。

又豐前の細川侯の家臣松田丹齋が傳へたる雪舟が門人等悅に授けた畫本の奥書に

予曾て南遊し、中朝の名手の畫を看るに、彥敬を以て師とするもの多し、爾來予も亦一時の好に從ふ、凡そ山水を畫けば則ち顰を彥敬に效ふとなす、吾れ等悅が畫本を求むるにより、仍りて此を寫して之を與ふ、吳興の夏氏士良曰く高彥敬の筆意は作者及び鮮しと、悅それ勤めよや

文明六年甲午正月下瀚

高彥敬の傳を按ずるに、彥敬は元の人、名は克恭、彥敬は其字である、房山と號す、其先は西域の人、後燕京に居り、仕へて刑部尚書に至る、好みて墨竹を作る、王黃華を學び、妙處文湖州に減せず、尤も山水を畫く、始め米氏父子を學び後、李成、董源、巨然の法を用ひ、造詣精絕なり、怪石噴浪灘頭水に、烘瑣潑染し、作者及ぶ鮮し、然れども着筆に輕からず、酒酣に興發し、或は好友前に在るに遇へば、縷楮を雜取し、墨を研し、毫を揮ひ、快に乘じて之をなす、神施鬼沒端倪すべからず、歿後遺墨を購ふもの、一紙率ね千百緡なりとある。

大明國明州天童第一座雪舟

雪舟は支那に居て、彦敬や夏珪馬遠等の遺墨に就いて大に研究したことゝ思はれる。けれども興彦龍の半陶集には、雪舟の四景圖に題し、

一朝來歸し、聲價十倍す、而して曰く、大唐國裏に畫師なし、畫なしと道はず、只是れ師なしと、蓋し泰華衡恒の山たる、江河淮濟の水たる、草木禽獸の異、人物風俗の殊、是れ大唐國の有畫なり。而して其潑墨の法、運筆の術、之を心に得て之を手を應じ、我心に在りて人に在らず、是れ大唐國に師なきなり。

と云つた如く、其山水其風土は彼が妙技を陶冶するに於て大に益があつたことであらう。

雪舟の明に在るや、我國の富士三保清見の三絶景を畫いた。當時明國の鴻儒詹仲和之に詩を題して、

巨嶂稜層鎮海涯　扶桑堪作上天梯　岩寒六月常留雪　勢似青蓮直過氐　名刹雲連清建古　虛堂塵遠老禪栖　乘風吾欲東遊去　特到松原竊羽衣

と、稱してゐる。

歸朝後の雪舟が先づ豐後に居を占めたことは、僧良心の天開圖畫樓記に、「楊々雪舟、勝地を豐府西北の隅に相し、一小樓を作し、榜に題して天開圖畫と曰ふ」とあるにて明かである。此記は文明八年の作であるから、其頃は此に留つたのであるが、梅花無盡藏に「歸棹を鼓し、小茅を筑紫城に結び、

興に乗じて諸州を遊戯し、行履滯るなく風塵表の質あり」とあるが如く、到る處を巡錫した事と思はれる。其後周防の山口に遷つた事は、了庵桂悟の天開圖畫樓記に「爾後防城の郡府に來り、地を卜して新に之を築く、之を望むに村塢の若く然り、岩石の幽邃、流泉の縈廻、跬歩の際城市とあひ霄壤す、亦天開圖畫を以て小閣の北牖に顔す」とあるにて知られる。此記文の年代は不明であるが、文中に、雲谷の齒古稀に垂んとすとあれば、雪舟が七十歳に近い頃、此地に居を占めてゐたのである。

雪舟の遺蹟に就ては、九州にて豐後日田郡求來里村に雪舟の舊跡あり、古へ醫王山正法寺と謂つたと記されてゐる、又

同郡中鶴河内にも亦雪舟の舊跡ありて、此地にては紙を漉き四方切と名くと見え、豐前の彦山龜石房には雪舟の築山あり、筑後下妻郡小田村の建仁寺にも亦雪舟の築山あり、同國の高柳に淹留の時、扇の地紙に畫を描いた。又筑前の蘆屋に逗留の時、鑄工が來て眞山水の繪を茶釜に乞うたから、需に應じて描いて與へた。此釜を眞手と名づくなど、傳へられてゐる。其他の處では相州藤澤附近の山田村にある了義寺を再興したと云ひ、武州杉田の東禪寺から、小田原の龍華寺に轉住したとも云ふけれども此等の諸説中には信ずべからざることが少からずある。雪舟は防州を去つて、石見國益田乙吉村の大喜庵に住ひ、永正三年八月八日、八十七歳の長壽を保ちて遠逝

したのである。雪舟老するに及で藝州御許山佛通寺に住し、後移りて備中の國後月郡大月山重源寺に住し、此寺に於て遷化すと云へる說は無論誤である。

梅花無盡藏に、「畫かんと欲するの時に當りて、先づ半器の淥を酌み、快く尺八を吹くこと數聲、或は倭歌を唱へ、或は唐詩を吟じ、箕踞盤礴して後筆を吸ひ紙に臨み、意氣揚々、龍の水を得るが如くなり」とあるを見ると、此畫聖の揮毫の風丰が思ひやられてゆかしい。

足利時代に起つた新藝術の氣運は絕大の天才雪舟の力に依りて之を助成し、後年新藝術の勃興となつたのである。狩野派が起り、江戸時代の繪畫諸流が起つたのも、畢竟其結果に外ならない。雪舟の天才は如拙周文を得て其進境を開き、支那の山水風土、前賢の遺墨に接して之を大成したのである。

彼は生れながらの天才があるとゝもに之を研究することを怠らなかつた。又彼の禪に得たる修養は其氣品を高からしめた。其高齡を得たることは、其天才を思ふ儘に發揮せしめたに於て與かつて功が多い。

雪舟自筆の壽像に明人靑霞題して曰く、

說破空花　本無色相　不現色相　以何供養　傳百千年　一日想像　嗟乎此卽師之凝思於詞藻之時、援毫於雪蕉之際、這般模樣　若夫所蘊蓄者　自在有情空盡無上者也

と。其有情空盡無上にあるものは、雪舟の天才と修養との結

果に外ならぬ。

附錄

高山彦九郎

一　尊王論の傳道者

「葦原の千五百秋の瑞穗の國は是れ吾が子孫の王たるべきの地なり、宜しく爾皇孫就して治しむべし、行け、寶祚の隆えまさんこと當に天壤と窮なかるべし」と天照大神が天孫天津彦彦火瓊々杵尊に宣り給へる神勅は、皇基の遠遠なるを示して、萬世一系なる無比の國體を明にし給ひたるものである。天皇は神聖にして犯すべからず、君は君にして臣は臣なりと

の觀念は遠く建國の當初より國民が堅く抱持したものである。

皇室は我等國民の宗家にてましまし、總ての氏の長者にてまします。我が國古代の制は上下總べて其職を世々にしたものである。其職毎に必ず部長がありて其下に部民がある。部長は其職を以て朝廷に仕へて、朝廷は之に姓を賜はる。祭祀を掌る職には中臣連あり、齋部首がある。此連と云ひ、首と云ふのが姓で、今で云へば爵のやうなものである。臣連直首などがそれである。中臣連は天兒屋根命の子孫で、其部民には齋部首がある。道臣命の子孫を大伴連と云つて、大伴部を率ゐて軍務に服する。大久米命の子孫には久米首があつて、久米部を

率ゐて、同じく軍事にたづさはる。饒速日命の後裔を物部連と稱し、物部を率ゐて宮中を衞る。此等は朝廷に仕へる有力なる氏族であるが、其他の職に至りても亦同樣である。石凝姥命の後には鏡作連があつて、鏡作部は鏡を作るを職とする。玉祖命の後は玉作連と云つて、玉作部を率ゐて玉を作る。此等の各部をば品部と稱へ、其數が多いから、總稱して、八十伴緒と稱し、各部の長を總稱して伴造と云ふ。皇室は此等の諸氏の上に立つて、之を總括し給ふ總本家であらせ給うた故に皇室と臣民との關係は普通の君臣以上に親密であり、又同時に嚴格なる關係が其間に存したのである。

蘇我蝦夷が專横を極めた時に、上宮大娘姫王は憤りて云ふ

「蘇我臣國政を擅にして、多に無禮を行す、天に二日なく、國に二王なし、何に由てか意の任に封せる民を役む」と。中大兄皇子は大化の改新の時に、自ら領し給へる領土領民を朝廷に返還し給ひて、「天に雙日なく、國に二王なし、是故に天下を兼ね併せて萬民を使ふべきは唯天皇のみ」と奏せられた。

此觀念は澎湃として國民の頭腦裡に先天的に刻みつけられたものである。既に之より先き、推古天皇の十二年、聖德太子が憲法十七條を制定し給へるや、

其第三條に曰く、詔を承けては必ず謹め、君をば天とし、臣をば地とし、天覆ひ地載す、四つの時順り行き、方氣通ふを得、地天を覆へさんと欲する時は壞を致さんのみ、是

を以て君の言ふときは臣承る、上行へば下靡く、故に詔を承けては必ず愼め、謹まざれば自ら敗れむ。

其第四條に曰く、群卿百寮、禮を以て本とせよ、其れ民を治むるの本は要、禮にあり、上、禮なきときは下齊にあらず、下禮なくんば以て必ず罪あり、是を以て君臣禮あるときは位の次亂れず、百姓禮あるときは國家、自ら治まる。

其第十二條に曰く、國司國造百姓に斂ること勿れ、國に二の君なく、民に兩の主なし、率土の兆民、王を以て主となす、所任官司は皆是れ王の臣、何ぞ敢て公と百姓に賦斂らむ。

と明に上下君臣の別を正し、皇室の無上なることを叙べてあ

る。

されば我國に叛臣があつても皇位を覬覦したものは弓削道鏡を除いてはないのである。蘇我氏の專權も皇室に擬せんとしたので、取つて代らうとしたとは思はれぬ。道鏡すらも、餘りに寵遇された結果で自發的よりは寧ろ他發的である。政敎混和の弊害と云はねばならぬ。「出家の天子には出家の大臣なくんば不可なり」と云ふ理由で、出家天子稱德天皇の下に出家の太政大臣禪師が出來たので、これから法王に進むに及び政治と宗敎とが全く混同したから、宗敎上の頭領たる道鏡が政治の頭領たらんことを望むやうになつたのである。しかし流石の稱德天皇も御不安にならせ給うたから宇佐八幡宮へ

神勅を請はせられた。「吾が國開闢以來、君臣の分自ら定まる臣を以て君となすこと未だこれあらず、天津日嗣は必ず皇胤を以て之を繼がしめよ、無道の人は宜しく速に之を掃蕩せよ」と一喝を下されると、此逆賊苦もなく萎縮して手も足も出なくなつたのを見ても、皇位の神聖なることが分る。平將門が藤原純友と比叡山四明ケ嶽に上り、皇城を俯瞰して、吾は平姓にして皇孫なれば天子となるべく、爾は藤原氏なれば宜しく攝政關白になるべし、と傲語したと云ふ傳說は大鏡や神皇正統記などに見えて居るが、將門と純友とが共謀した仕事ではないから、此傳說の價値は頗る怪しいものである。假りにあつたとした所が高が一場の痴人の傲語、取りとめのないよ

まひ言である。將門が下總の亭南に僞宮を造り、諸國の除目を行ひ、文武百官を定め、自ら新皇と號したるは、成金の贅澤三昧、ほんの氣違ひじみた芝居に過ぎぬ。藤原氏の專横も外戚となり、氏長者となり、攝政關白となるより外に些の慾望もない。源頼朝が幕府を開いても、實權を收むるに止りて皇室を尊重することを忘れぬ。北條義時の如き、三上皇を新島守に遷し參らせたが、承久の亂に、其子泰時が、若し路に鳳輦に出で逢ひ奉らば如何にせんと問ひたれば、其時は弓を折り偏に畏り奉れと訓示した。足利尊氏も其名義を設けんためには持明院統を立てることを忘れぬ。南北朝の爭ひは正閏の爭ひで、皇室の尊嚴にして神聖なることは依然として渝らぬ。

足利義滿の薨じた時に、滿廷婦女子の如き世の中のことで太上天皇の號を賜はらんとした。之は義滿の夫人康子が准母准三宮に任ぜられたから、其夫なる義滿にも此御沙汰があつたのである。しかし其子義持は其非を知つて、「人臣に太上天皇を贈位あることは古今未だ候はず」とて御辭退申した。勿論斯うあるべきことで、日本國王臣道義と國辱の交通をなした義滿の對明策を喜ばずに、「神、又人に憑りて云ふ、我國古より未だ嘗て外邦に向ひて臣を稱せず、近來前制に違ひ、曆を受け印を受けて却けず、是れ主君の病を招く所以なり」と刎ねつけた義持は同じ筆法で乃父の大過を矯正したのである。將軍義政が驕奢を行ひて民政を恤まざるも、後花園天皇が

殘民爭採首陽薇　處々閉レ爐鎖ニ竹扉一
詩興吟酸春二月　滿城紅綠爲レ誰肥

と諷し給へるに恐懼して、一時其第宅の建築を中止したのである。

「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ」と萬葉詩人が歌ひたる、「海はあせ山は裂けなん世なりとも君に二心我れあらめやも」と鎌倉右大臣が詠じたる、これが日本國民が皇室に對する觀念である。しかし權力を私するものは皇室の神聖を犯しはせぬが、陽に尊で陰には之を抑へんとする。覇者が皇室に對するやり方は皆斯のやうであつた。殊に應仁以後天下麻のやうに亂れて、下剋上の世となり、將軍は出奔して席暖まるに遑あらざる際に、皇室の供御などは殆ど顧みるに暇のなかつたのは、洵に恐れ多い次第である。

けれども斯う云ふ世にも尊王の大義を懷くものも亦少からずあつた。織田信秀の如きは、天文十二年に家臣平手政秀を京都に遣して、禁裡の築地修理料四千貫を献上した。さればその子の信長も亦尊王の志に富で居たから、京都に入ると、供御を朝廷に增進し、宮中の諸節會、賀茂の祭等廢典となつたものを復興した。豐臣秀吉も其遺志を紹いで、禁裡の修理をなし、仙洞御所を修め、御料を献上することなどをつとめる。天正十六年四月には新に經營したる聚樂第に行幸を仰いで、

盛儀を行ひ、御料を皇室に上り、又諸將に命じて誓書を出だ
さしめて、皇室及公卿の領邑を侵さゞることなどを誓はしめ
た。徳川家康が府を江戸に開くに及で、陽に皇室を尊びて、
實は之を抑へるの政策を執りたる事は源氏足利氏の致せしこ
と丶異らぬのみならず、却て巧妙であつた。公家法度の第一
條には天子藝能の事と題して、「天子は寛平(宇多法皇)の遺戒に
從ひて、專ら古道を學び、傍ら和歌を習ふべき」旨を述べた
のは、つまり學藝のみに御身を入れ給ひて、大權の恢復に御
心を注ぎ給ふべからずとの義に外ならぬ。家康は己れの孫女
を後水尾天皇の中宮に納れ、其の生みたる內親王を立て丶天
子としたが、これが明正天皇である。天皇は御歳僅に八歳で

しかも稱德天皇以後八百年にして、始めて女帝の卽位を見た
のである。しかも後水尾天皇の御讓位も、妙心寺大德寺兩派
の紫衣勅許事件の結果、天皇は御憤懣の餘り、御脫屣を決せ
られたのである。

江戸は盛であつたが、京都は微々として甚だ衰へて居た。
江戸は實力の都會で、京都は唯に名の所在地に過ぎぬ。故傍
の御陵を初めとして御歷代の山陵は荒れ果てたが、日光久能
山は輪奐の美を極める。江戸は陽氣で、京都は陰氣である。
江戸は晴れて、京都は曇る。元祿頃となりては文藝も東下し、
時の將軍綱吉の文學奬勵に依りて、江戸の奎運は甚だ觀るべ
きものがあつた。一體家康が文學好きであつた所から、漢學

は日に〳〵復興する。然るに元祿頃となりては國學も亦盛となつて、下河邊長流、僧契沖のやうな學者が出る、荷田東滿賀茂眞淵、本居宣長などが出て、頻に古學を研究し國史を闡明する。斯う古典の研鑽が始まると、其結果國體が明るくなり、尊王の大義が的確になつて來るのは自然の數である。

幕府が學術を奬勵した爲に、又當時の傾向として、諸藩もまた頻りに學問をすゝめ、爭うて學者を招聘する。其うち最も名高くあつたのは水戸藩の德川光圀である。光圀は少時史記の伯夷傳を讀で感憤し、遂に國史編纂の志を起したと云ふことである。明曆年間、神田の別邸に史局を設け、其後、彰考館を置き、學者を招いて大日本史の編纂に力を盡した。所

が此招聘に應じた學者は概ね京都からであつた。一體江戸の學者は祿仕して、其學說を實際の上に現さんとするものが多いのに反して、京都の學者は多く帷を下して諸生を敎へる。江戸の荻生徂徠、新井君美等は學者なるとゝもに政治家であつた。然るに京都の伊藤仁齋は紀州侯の聘を謝して堀河に塾を開き、在野の學者として其子東涯とゝもに、當時の權威であつた。それで此等の京都學者はいづれも京都の衰替に憤慨して居る連中である。京都の現狀と江戸の現狀とを比較して尊王賤覇の思想を懷抱して居る。此う云ふ學者が水戸に招かれて大日本史の編纂に從事したから、どうしても大義名分を明にすると云ふことになるのは自然の結果である。されば大日

本史では神功皇后を后妃傳に列し、弘文天皇を本紀に加へ、南北朝の正閏を明にして、大義名分を正うしたのである。光圀は又楠木正成の忠節義烈を彰さんが爲に碑を湊川に建て、「嗚呼忠臣楠子之墓」と題し碑陰に明の遺臣朱之瑜の賛を刻した。尊王論は幕府の近親なる水戸藩から動き初めたのである。

享保年中に至り、竹内式部ありて、王政復古の志を抱き、公卿に之を鼓吹したのは、尊王論者の先驅であつた。之と殆ど時を同うして甲府の與力山縣大貳は柳子新論、院政略記を著して、其微意のある所を述べた。一葉落ちて天下の秋を知る。尊王論は次第に風雲を捲き起さんとしつゝあつたのであ

然れども二人者は尊王論の先驅であつたが、未だ傳道者ではなかつた。其傳道者は卽ち吾が高山彦九郎である。

時勢は英雄を作るが、英雄も亦時勢を作る。時勢は彦九郎を生んだが、彦九郎は又時勢を簸揚した。眇たる上毛の一野人は後年天下を動かすの大勢力を作つたのである。大日本史は大義名分を明にした尊王論の源ではあつたが、鼓吹者ではなかつた。式部大貳は先驅者ではなく、一部分の時代思潮を胚胎したるに止る。彦九郎に至りては自ら此の主義を傳道し、其の熱烈なる精神を以て盛に鼓吹しつゝあつたのである。水は動き風は起らざるを得ない。久しく人心の裡に潜める尊王論は彼が絶大の力に依りて復活され、其勢を增したのである。

近世に於ける尊王論の大傳道者は實に快男兒高山彦九郎其の人である。

二　渡良瀬川の兩岸

上野と下野との間を流るゝ川を渡良瀬川と云ふ。古書にも渡良瀬をもつて上毛野下毛野兩國の境となすとありて、往時は此の一水をもつて兩國の國界となしたものである。此の川は源を足尾山に發して下流は利根川に合する。山の峽を流る溪流のことゝして、屢々其の瀬を變じ、今の流れと古の流れとは其の處を異にする處が多い。今は川の流れが足利から太田に通ふ渡良瀬橋の袂にある淺間山の此方の下を流れてゐる

が、昔は山の彼方を廻つて流れてゐたものである。足尾の鑛毒事件で僅かに其の名を傳へられてゐる川も、古へ源平時代にあつては、兵衞佐源頼朝が上野下野の勢を駈催して渡瀬地を廻つて打上らんとした所である。

渡良瀬川の此方の岸は卽ち下野の足利で、對岸は上野の新田郡である。足利は古代の足利庄であつて藤原秀郷より出でたる足利氏がこれを領してゐたが、平家に味方したが爲に滅亡した。其後これに代りたるものは卽ち源氏より出でたる足利氏である。足利義兼は源頼朝の寵を受けたのみならず、北條時政と婚姻を結んだ爲に一族盛大となり、其の門葉繁衍し、遂に尊氏に至つて兵馬の權を掌握するに至つた。新田郡は卽

ち新田氏の根據地で、源義國の長子義重が足利より來り、新田庄司となりて、一族頗る多く、世良田、岩松、由良、脇屋、寺井、堀口、大館、里見、江田、額田等の地名を負へる族黨が此の附近に繁くあつた。尊氏は言ふ迄もなく建武天子に叛きたる逆臣であつて、新田義貞は勤王黨の旗頭である。

地勢と人情とは密接なる關係がある。關東と關西とは其の風土を異にするとともに其の人情風俗の相違が著しい。然し同じ關東においても個人によつて又各々特殊の點を具へる事は爭ふ可からざる事實である。渡良瀬の一水を隔つる足利と新田とに居住したる武家の棟梁は各々其性格を異にした。義貞は情の人であつて涙脆く、其やりかたは如何にも氣の利い

た思ひやりの深い、萬事粋を尚ぶ處があつた。尊氏を追討して箱根に戰ひ、敗れて京師に歸らんとする時に天龍川の舟橋を撤せずして、「敗軍の我さへ架けたる舟橋を、勝てる足利勢が架け得るにはさほど力の入らぬ事である、唯其まゝに捨おいて足利勢の渡れる樣守り居れよ」と命じた。勝誇りたる足利勢天龍川に到着して、舟橋の其まゝになれるを見て如何にして新田勢はこれを撤せざりしやと問へば、橋守しかく〳〵と答ふ。足利勢いたく感服して、流石に義貞はよき大將なる哉と譽めそやしたと云ふ事である。如何にも足利勢より言へば都合のよい大將であつたかも知れぬ。義貞より云へば如何にも其のやり方は粋であつた。然し天下の大勢から云ふと又戰

略上から云ふと、舟橋の保存は策の下なるもので、義貞は兵機に疎い譏を免れぬ。足利勢をして架橋工事の爲に一兩日を空費せしめたならば、奥の靈山を出發した北畠顯家と尊氏を挾撃して其兵勢を挫ぐ事は易々たるものであつたらうと思はれる。義貞の粹なやり方は好機を逸せしめた。義貞は天下の爭亂久しきに渉れるを憂ひ、東寺の尊氏の陣近くに旗を進め、自から尊氏と一騎討の勝負を決せん事を申込んだ。尊氏がこれに應ぜざるは固より言ふに及ばぬ。其の求女塚に於ても足羽に於ても其の身代りとならんとし若しくは矢面に立たんとしたる臣下の申出を拒みて、死なば諸共と稱して萬事が情的に行動したから、或は勾當内侍の色香に溺れて出軍の機を誤り、或は死なでもよき最後を燈明寺畷に遂げたのである。

燈明寺畷に立ちて古足羽七城を回首すると、此情的武將の數奇なる運命と、南朝天子の御不運とに悵然たるものがある。足羽七城と云つても、高が小さい砦に過ぎぬ。前には深田を控へた、簡單なる要塞である。義貞は此時に殆ど北陸を席捲する勢があつた。嘗て一たびは木芽峠に苦み、又金ケ崎に金枝玉葉の皇子達を失ひ奉らしめたほど不運であつたが、次第に其勢を恢復して、吉野朝廷より厚く御依囑になつた北國經營は將に成功せんとして居た。越後の國の領邑からは既に續續として援兵が到來し、河合の庄に人馬肅々として其一令の發するを待つて居た。眇たる足羽七城にかゝり合はせるより

か、吉野朝廷からの櫛の齒を引くが如き御催促に應じて馬を叡山四明ケ嶽に進め、北畠顯信を男山に援るのが、義貞のなすべき所であつた。斯波高經の如きは棄てて置いても大したことはないのである。足羽七城は自滅するより外はあるまい。然るに義貞は上洛に先だちて、足羽七城を一掃せんなどゝ下らぬ了簡を出し、總大將が出るべき幕でもないのに、足羽の一城を攻むる味方の勢の捗ばかしからざるを見るや、秋雨のしと〳〵降る夕、寡兵を率ゐて、燈明寺畷をさして急ぎ行く。途中ではッたと出逢ひたる敵勢は之を新田の總大將とは知らず、散々に射かける。味方は之を防ぐ楯もない。一郎黨侍大將、こは一大事と見て、義貞を中に圓陣を作り、身を以て防矢せ

んとする。義貞之を見て、「汝等を殺して我れ獨り活くる法やある」と、例の情的人物の事として、自ら敵に渡り合はさんとする。流矢一筋義貞の乘馬に中る。馬は高く嘶いてがばと倒れた。此時白羽箭あり、電の如く空を剪つて、發矢と義貞の額に中る。義貞萬事畢れりとなして、直に自ら首を刎ね、之を泥中に埋め、其上に倒れ伏して、北國經營の功は一朝にして、畫餅に歸した。まことにつまらない最期と云はねばならぬ。しかし之も義貞の義貞たる所で、彼には關東男兒の情に依り義に依りて進退する俠骨があつた。嘗て播州白旗城を攻めて克たず、加古川を渡らんとした時に先づ傷き病めるもの弱きものを渡し、總大將自らは最後に之を渡つたと云ふ美な

る特性は、彼の生涯を一貫して居ると思ふ。彼の血管には脉脉たる關東男兒のうるはしい血が流れて居る。

尊氏になると之に異る。彼は情的でなくて寧ろ智的であつた。感情の人でなくて、意志の人であつた。情で働くよりは、理性に依つて動く人であつた。敗れて死すべき途にあつても、彼は飽くまでも生き延びて、初一念を貫徹せんとつとめた。固より細心精慮なる直義が之を助けた其力は多かりしとは云へ、尊氏の一擧一動は義貞のそれと異りて、強き意志の下に立ち働いたのであつた。然らば彼には關東男兒の特色がなかつたかと云ふと、否、やはり彼も亦關東男兒である。上州長脇差の風は野州にも及で居る。彼の度量は天空海濶で、又頗

る氣前がよかつた。此氣前のよかつたと云ふことは彼の善く士心を得たる所以で、又天下を取つた原因である。彼は善く散じて善く大勢力を作つた。是は彼の策畧ではあつたが、彼は天性斯かる人に生れたのである。けれども其の餘りに氣前のよかつたと云ふことは、足利時代の下尅上の基を開き、六分一殿だの、十國の大守だのを作つて、其末尾大掉はざる形勢に立ち到らしめたのである。

同じ關東男兒で、渡良瀨川を境として、彼此相對して居たが、兩者には斯う性格の相違がある。しかし關東男兒の性格の特殊なる點は兩者各々相與に有して居る、之を支那に譬へると、漢の高祖、楚の項羽とに酷似して居る。高祖は智的で

項羽は情的である。韓信は項羽を評して婦人の仁だと云つて居る。項羽に名馬騅があつて、義貞に大鹿毛がある。義貞に勾當内侍があつて、項羽に虞美人がある。項羽も高祖も單騎雌雄を決せんとした。高祖の父太公を捕へて之を殺すに忍びず、太公を俎上に載せて、高祖に示したるも、高祖は却つて我に其の一杯の羹を分てと云つて平然たるを裝うた。垓下の戰に敗れて、走るや烏江の亭長船を艤して待ち、「唯臣獨り船あり大王疾く渡り給へ、漢兵繼ぎ至るも渡るなけん」と云ひたるに、項羽飜然として悟り、渡ることを止めて、此に死なんと決心した。之れまでは項羽は烏江を渡る積で居たのに、急に心の變つたのは、之れ項羽の項羽たる所で、彼が情的人

物たる面目が躍如として居る。田父に紿かれてなしたるが爲に大澤に陷り、遂に漢兵の追及する所となつたのに懲りて、烏江亭長の船も詭計あらんことを恐れ、渡るべきを中止したのであらうなどと云ふ批評を下すものは、眼光紙背に徹せざるの致す所である。項羽は曾て江東の子弟八千人と江を渡つたのである。然るに今一人の從ふものがなく、概ね戰死したのである。是に至りて項羽は何の面目ありて江東の父兄を見んや、縱令ひ彼云はざるも我獨り心に愧ぢざらんやと、是に感激したのである。尊氏ならば江を渡りて活きたであらうが、ナポレオン、ボナパルトならば遁れるだけ遁れたであらう。しかし情の人項羽は之をなすに忍びなかつた。義貞に至りて

も亦同樣の結果に至つたであらうと想像する。

されば尊氏叛せずんば義貞が叛するであらう。叛せぬまでも必ず武門の棟梁として權威を張り眼中朝廷がなかつたであらう、などゝ議論するものがあるが、之は義貞を知らざるの致す所である。義貞はさやうに利害に明敏な人ではなかつた。尊氏が義貞を除くと稱して兵を擧げたのは、全く名義に過ぎぬ。義貞は尊氏たり得べき人ではない。若し其の人物の大小より云ふと、尊氏は遙に義貞の上に出づる。しかし其一身のみならず一族郎黨また王事に盡くして匪躬の節を致した點になると尊氏や足利氏などが及ぶ所でない。美しい情の血は新田氏の代々受けついだ所である。

利害に依つて結び合ひたる連鎖は利害關係がなくなると同時に離れる。六分一殿になつても十國の太守になつても、もと〳〵情に依り意氣に依りて相許したものではない。事我に非なりと見れば直に其矛を逆にして反噬する。足利氏はもとも之を利用したに過ぎぬ。されば利用がすむと不用になるばかりでなく、却つて我に害ありと感ずる。是に於て何等かの辭柄を設け之を討滅して後年の禍根を絶たんとする。されば足利氏の君臣は離合集散が常ならぬ。吉野朝廷を佐けた楠木氏にもせよ、北畠氏にもせよ、まつた新田氏にても、此點に至ると、君臣主從が膠の如く漆の如く、逆境裡に處して、更に其節義を變へぬ。南朝五十七年の歷史が美しき國民精神

の發露であるのは此點にある。

武士道の名稱は、當時に存在しなかつたが、兎に角鎌倉時代に於てその形式を備へた。名を惜み、身命を輕じ、廉恥心を重じ、君の馬前に死するを榮譽とし、簡素質朴の風を喜だのは、鎌倉武士の特色であつた。しかし武士も人間である以上は、利慾に眼をくれ、領分爭ひに恥も名も忘れたと云ふことは其當時に於ても頻々であつた。貞永式目などを讀むと明に其證據がある。鎌倉時代の唯一史料なる吾妻鏡を見ても其の引例は煩しいほどある。建武中興が僅々數年にして瓦解したのも之が爲めである。北朝の樹立にも少からず其影響がある。足利氏君臣の離合も之が爲めである。然るに此武士道を

更に醇なるものとさせたのは、南朝君臣苦節の賜物と云はねばならぬ。

若し嚴重なる史的批判を下せば、其の醇なるものに就ても一二の議すべきものはあらう。しかし人間に至醇を求むるは酷である。又見方によると、どうでも取れる。我等はさやうな苛酷なる追求を非なりとする。他を責むるに周にして、己を責むるに寛なるは、なべての人情である。帝舜は人と善をなすを喜び、常に人に取りて善をなし、それで遂に至善となつたと云ふことである。我等は其の美しい處を願て之に歸依し之を渴仰して修養の基とせねばならぬ。

歴史に依りて、偉人の傳記に依りて、我等は何等の教訓を

得んとするのか。前人の失敗に鑑み、前人の美談にあこがれ、我等自らの修養に資せんとするのである。南朝五十七年間の君臣の事蹟は此點に於て我等に無限の大なる教訓を殘して居る。同じ渡良瀨川の左右ではあるが、上州新田郡に咲いた花は美しい實を結び、今猶燦然として輝やく。此花は誰が植ゑた種から咲いたのであるか。情的武將なる新田義貞が播いた其種子から生じたものではないか。義貞の運命は數奇で悲壯であつたが、美しく又極めて力ある感化あるものであつたと云はねばならぬ。

今日は下野足利は織物の產地として工業地として名高い。又其處には足利學校の遺跡があつて文敎の地に墜ちたる足利

季世に一穗の寒燈善く文敎の生命を維持した其名殘をとゞめて居る。然るに上野新田郡の太田は僅に呑龍上人の大光院が盛で、新田氏の故城址なる金山も高山神社も大光院の前景若くは背景として存在するに過ぎぬのは嘆はしい次第である。

唯それ新田氏の事蹟は千歲の下猶活きて亡びぬ。

然も此新田郡は高山彦九郎其人の生地である。彦九郎が勤王論の鼓吹者となつたのも、亦新田氏の賜物と云はねばならぬ。

三　時勢

高山彦九郎は上野の國新田郡細谷村の人である。現今は澤

野村の一字であるが、ふ名が、新田系圖に見えて、新田又太郎政氏の子とある。此政氏は義貞から三代の祖に當つて居るが、其の細谷を以て名けたのは此地に負うたのである。

彦九郎は寛政五年に四十七歳で沒して居る。之から逆算すると延享四年の出生に當る。此歳九月二十一日、桃園天皇は櫻町天皇に讓を受けて御卽位あらせられ、江戸では九代將軍家重が將軍職を繼いでから方に三年目に當る。京都の文明は五代將軍綱吉の頃からして東下したが、八代將軍吉宗の時には殆ど江戸の文明を作り上げ、それが十一代將軍家齊の時に爛熟したと云つてよろしい。綱吉は其初政に當りて、勵精治

を圖つたが、江戸の盛なるとゝもに驕奢に耽り、其の元祿時代が華やかなると同じく、綱吉も亦華奢な晩年を送つた。それが爲め幕府の綱紀は漸くに弛み、六代家宣七代家繼の治世がいづれも短かゝつたが爲に幕政は未だ張るに及ばなかつた。然るに吉宗が紀州から入つて將軍職を襲ぐに及び、其の天禀の政治的技倆を發揮したが爲に、在職二十九年の所謂有德院殿時代又は享保時代に幕府の政治が頓に其面目を一新して、幕府の光輝は到らざる所なしと云ふ有樣であつた。此將軍は怜悧で眞面目で識見があり、膽力があり、文あり、武あり躬行實踐家で、質素恭儉の理想的政治家であつたから、天下は盡く之を仰慕したのである。德川十五代將軍隨一の明君と云

つてよろしい。

享保時代は我が文化史上文藝史上で、最も華やかなる一つである。儒者では江戸には荻生徂徠あり、京都には伊藤東涯があり、其他林鳳岡、新井白石、太宰春臺、雨森芳洲、室鳩巣、安積澹泊、三宅尚齋などが居るし、淨瑠璃作家としては古今獨歩の近松門左衞門が出で、竹本義太夫と相待て操人形に生面を開き、繪畫には西に尾形光琳あり、東に英一蝶などが出で光琳の弟乾山は陶器の技に其風韻を寄せる。沈南蘋は長崎に其畫法を傳へ、西川祐信は京都に在りて、浮世繪に艶麗の筆致を現はす。俳諧は芭蕉死後久からず、其角が開いた江戸座が盛になり、芭蕉門の高弟が起した各地各派の俳壇も

盛となつて來た。青木文藏が洋學を修めたのも此時代である、古今圖書集成が舶載されたのも此時代である、武德編年集成が編纂されたのも此時代である、六諭衍義和解を頒行したのも此時代である。江戸には名奉行大岡越前守忠相が登庸せられる、洋學の禁は解かれ。將軍自ら渾天儀簡天儀測午表を作る、江戸神田には司天所を設け、京都梅小路には測量所を置く。醫者には數原通玄、古林見宜、望月三英の名醫が輩出し、備急の奇法を集めたる普救類方は梓行せられる。甘藷は盛に培養せられ、砂糖蔗の栽培も奬勵せられる。足高の制を行ひて、人才登庸の道を開き、民政に注意して救慈の法を講じ、公事方定書を作りて法を正し、目安箱を設けて廣く天下の言